

**【表紙】**

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	近畿財務局長
【提出日】	2020年1月30日
【事業年度】	第34期（自 2018年11月1日 至 2019年10月31日）
【会社名】	株式会社ビーアンドピー
【英訳名】	B & P C o . , L t d .
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 和田山 朋弥
【本店の所在の場所】	大阪市西区江戸堀二丁目6番33号
【電話番号】	06-6448-1801
【事務連絡者氏名】	取締役 清水 明
【最寄りの連絡場所】	大阪市西区江戸堀二丁目6番33号
【電話番号】	06-6448-1801
【事務連絡者氏名】	取締役 清水 明
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号）

## 第一部【企業情報】

## 第1【企業の概況】

## 1【主要な経営指標等の推移】

## (1) 連結経営指標等

回次	第32期	第33期	第34期
決算年月	2017年10月	2018年10月	2019年10月
売上高 (千円)	2,899,247	3,067,197	-
経常利益 (千円)	480,021	639,124	-
親会社株主に帰属する当期純利益 (千円)	277,139	464,069	-
包括利益 (千円)	277,139	464,069	-
純資産額 (千円)	1,421,372	-	-
総資産額 (千円)	2,097,826	-	-
1株当たり純資産額 (円)	710.68	-	-
1株当たり当期純利益 (円)	138.56	232.03	-
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	-	-	-
自己資本比率 (%)	67.75	-	-
自己資本利益率 (%)	21.11	-	-
株価収益率 (倍)	-	-	-
営業活動によるキャッシュ・フロー (千円)	476,332	391,159	-
投資活動によるキャッシュ・フロー (千円)	142,514	39,157	-
財務活動によるキャッシュ・フロー (千円)	94,203	88,829	-
現金及び現金同等物の期末残高 (千円)	1,094,418	1,357,591	-
従業員数 (人)	176	-	-
[外、平均臨時雇用者数]	[14]	[-]	[-]

(注) 1. 当社は、第32期より連結財務諸表を作成しております。なお、第33期については、期中に唯一の連結子会社である株式会社ニコールを吸収合併し、連結会計年度末においては連結子会社が存在しないため、連結貸借対照表を作成しておりません。そのため第33期の純資産額、総資産額、1株当たり純資産額、自己資本比率、自己資本利益率及び従業員数については記載しておりません。また、第34期より連結財務諸表を作成していないため、連結経営指標等については記載しておりません。

2. 売上高には、消費税等は含まれておりません。

3. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、第32期は潜在株式が存在しないため、第33期は新株予約権の残高はありますが、当社株式は非上場であるため、期中平均株価が把握できませんので記載しておりません。

4. 第32期及び第33期の株価収益率については、当社株式は非上場であったため、記載しておりません。

5. 第32期及び第33期の連結財務諸表については、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)に基づき作成しており、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、PwC京都監査法人の監査を受けております。

6. 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数(パートタイマー)は、年間の平均人員を[]外数で記載しております。

7. 当社の決算日について第32期までは10月20日ですが、2018年1月11日開催の第32期定時株主総会決議において定款の一部変更を行い、第33期から10月31日となっております。

8. 2018年3月30日開催の取締役会決議により、2018年4月20日付で普通株式1株につき10,000株の株式分割を行っております。そのため、第32期の期首に当該株式分割が行われたと仮定し、1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益を算定しております。

## (2) 提出会社の経営指標等

回次	第30期	第31期	第32期	第33期	第34期
決算年月	2015年10月	2016年10月	2017年10月	2018年10月	2019年10月
売上高 (千円)	1,598,954	1,826,457	1,945,191	2,407,247	3,011,486
経常利益 (千円)	307,249	350,658	376,430	553,353	426,218
当期純利益 (千円)	204,887	253,728	197,645	543,562	311,120
持分法を適用した場合の投資利益 (千円)	-	-	-	-	-
資本金 (千円)	10,000	10,000	10,000	10,000	286,000
発行済株式総数 (株)	200	200	200	2,000,000	2,300,000
純資産額 (千円)	1,158,260	1,204,233	1,341,878	1,825,441	2,588,562
総資産額 (千円)	1,414,551	1,477,966	1,784,135	2,451,557	3,160,344
1株当たり純資産額 (円)	579.13	602.11	670.93	912.72	1,125.46
1株当たり配当額 (円)	1,000,000	300,000	300,000	50	50
(うち1株当たり中間配当額)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
1株当たり当期純利益 (円)	102.44	126.86	98.82	271.78	149.36
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	-	-	-	-	146.98
自己資本比率 (%)	81.88	81.48	75.21	74.46	81.91
自己資本利益率 (%)	19.41	21.48	15.53	34.32	14.10
株価収益率 (倍)	-	-	-	-	13.72
配当性向 (%)	97.6	23.6	30.4	18.4	33.5
営業活動によるキャッシュ・フロー (千円)	-	-	-	-	439,483
投資活動によるキャッシュ・フロー (千円)	-	-	-	-	71,218
財務活動によるキャッシュ・フロー (千円)	-	-	-	-	428,694
現金及び現金同等物の期末残高 (千円)	-	-	-	-	2,154,550
従業員数 (人)	92	116	124	173	184
[外、平均臨時雇用者数]	[-]	[-]	[1]	[11]	[9]
株主総利回り (%)	-	-	-	-	-
(比較指標: -) (%)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
最高株価 (円)	-	-	-	-	2,600
最低株価 (円)	-	-	-	-	1,859

(注) 1. 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2. 第30期、第31期及び第34期に係る持分法を適用した場合の投資利益については、関連会社が存在しないため、また第32期及び第33期は連結財務諸表を作成しているため記載しておりません。

3. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、第30期、第31期及び第32期は潜在株式が存在しないため、第33期は新株予約権の残高はありますが、当社株式は非上場であり、期中平均株価が把握できないため記載しておりません。

4. 第34期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、当社は2019年7月24日に東京証券取引所マザーズ市場に上場したため、新規上場日から第34期末までの平均株価を期中平均株価とみなして算定しております。
5. 第30期から第33期までの株価収益率については、当社株式は非上場であったため、記載しておりません。
6. キャッシュ・フロー計算書に係る各項目については、第30期及び第31期はキャッシュ・フロー計算書を作成していないため、また第32期及び第33期は連結財務諸表を作成しているため記載しておりません。
7. 第32期以降の財務諸表については、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号)に基づき作成しており、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、PwC京都監査法人の監査を受けております。
8. 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数(パートタイマー)は、最近1年間の平均人員を[]外数で記載しております。
9. 株主総利回り及び比較指標については、2019年7月24日に東京証券取引所マザーズ市場に上場したため、記載しておりません。
10. 最高株価及び最低株価は、東京証券取引所マザーズ市場における株価を記載しております。
11. 当社株式は、2019年7月24日から東京証券取引所マザーズ市場に上場しております。それ以前の株価については該当事項はありません。
12. 当社の決算日について第32期までは10月20日ですが、2018年1月11日開催の第32期定時株主総会決議において定款の一部変更を行い、第33期から10月31日となっております。
13. 当社は、2018年4月20日付で普通株式1株につき10,000株の割合で株式分割を行っております。そのため、第30期の期首に当該株式分割が行われたと仮定して1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益を算定しております。

## 2【沿革】

1985年10月	和田山コピーセンター株式会社を資本金300万円にて大阪市西区阿波座に設立し、ゼロックス専用のコピーサービス事業を開始
1990年11月	株式会社ピーアンドピーを設立し、大判フルカラー印刷機による大判カラープリント出力事業に参入。和田山コピーセンター株式会社はコピーサービス事業専門に、株式会社ピーアンドピーは大判カラープリント出力事業に事業を区分する
1991年10月	大判カラープリント出力事業を和田山コピーセンター株式会社へ移管すると同時に、和田山コピーセンター株式会社を株式会社ピーアンドピーに社名変更し、旧株式会社ピーアンドピーを清算する
1996年4月	大判フルカラー印刷機を一新し、世界初の写真画質のインクジェットプリンターを導入 インクジェットプリンターの導入により、大判カラープリント出力事業をインクジェット出力事業に名称変更
2001年10月	コピーサービス業から撤退し、インクジェット出力事業に全面的に参入
2002年7月	南青山営業所を開設し、東京へ進出
2007年1月	東京営業所を現在の住所である東京都港区新橋5丁目に開設
2009年10月	従来のダンボールより丈夫でリサイクル可能な段ボール商品『リボード』（注1）の取扱いを開始
2010年6月	プライバシーマークを取得
2010年12月	大阪本店を現在の住所である大阪市西区江戸堀へ移転
2013年7月	5m幅までの出力を可能とする高速広幅UV出力機を大阪本社に導入し、西日本エリアのサイン業者を中心に屋外広幅出力サービスを開始する
2014年1月	東京営業所を東京本社とし、一部本社機能を大阪本店より移管する
2014年7月	ネット通販サイト『ハイプリント』の営業を開始
2014年11月	高速広幅UV出力機の最新鋭モデルを東京本社へ増設し、東日本エリアでも屋外広幅出力サービスを開始する
2015年5月	江東事業所を東京都江東区東陽に開設し、大阪、東京、江東を生産拠点とする 布地への出力を可能とする昇華転写出力サービス（注2）を開始する
2016年11月	株式会社ニコールを買収し100%子会社とする。プリントシール機の外装カーテン、壁紙等の生活資材製品が取扱製品に加わる 生産拠点が大阪・東京・江東・横浜となる
2018年3月	3Dプリンターを東京本社に導入し、3Dプリントサービスを開始
2018年7月	株式会社ニコールを吸収合併し、ニコール事業部とする
2018年12月	江東事業所をニコール事業部（横浜市神奈川区守屋町）の隣接地に移転しワイドフォーマットスタジオを開設
2019年4月	福岡営業所を福岡市博多区に開設
2019年7月	東京証券取引所マザーズに株式を上場
2019年11月	名古屋営業所を名古屋市中村区に開設

### （注）1.リボード:

スウェーデン生まれの環境配慮型の段ボール素材です。100%紙素材ながら非常に高い耐湿・耐久性を持っており、展示会などの短期イベントや店頭ディスプレイなどに利用されております。

### （注）2.昇華転写出力サービス:

昇華型インク（分散染料インク）をインクジェットプリンターで転写紙に鏡像（左右反転）印刷し、その転写紙の印刷面を転写素材（ポリエステル等の布地）の転写面に合わせて、熱転写機にて、高温と圧力を加えることにより、気化したインクが被転写物の分子構造に入り込み、染色する技術を昇華転写プリントと言います。使用用途としては、のぼり旗やタペストリー等の風合いのある布地が挙げられます。

### 3【事業の内容】

当社では、インクジェット技術を世の中、日本社会、市民生活の発展の為に普及させる為に、「より良い働きを通じて 全従業員の物心両面の幸せを創造し 社会へ貢献しよう」という企業理念を掲げております。

また、当社は、顧客からの受注に基づき、業務用の大判インクジェットプリンターを使用し、プリント・加工・納品までを一貫して行うインクジェット出力事業を行っております。広告代理店、広告制作会社、印刷会社、デザイン会社等から発注される「販売促進用広告物の制作」及びゲーム機メーカーが取り扱うプリントシール機の外装カーテン、並びにインテリアメーカーやインテリア専門商社が取り扱う、内装壁紙や床材等の「生活資材・製品制作」を主たる事業としております。

約25年前に印刷業界において、アナログ写植から組版～製版など印刷前の作業工程がデジタル化され、オンデマンドの利点を活かした特定の分野で、着実にインクジェットプリントがその適用分野を拡大しつつありました。インクジェットプリントは、オフセット印刷と比較して版作成が不要（版レス）のため、スピード対応が可能で短納期にも対応できることや、必要なものを必要なだけ制作できるため、余分な在庫をかかえる必要がなく極小ロットにも対応できることが大きな特徴です。また、オフセット印刷では不可能なサイズへのプリントが可能となり、応用範囲が格段に広がってきました。従来の印刷方法では、少数のもの（特に大判のもの）も必ず大量印刷物と同じ工程をとらなければならなかったため、コスト的に見合わずに断念するケースが多くみられました。

しかし、ここ近年において、大判インクジェットプリンター製品の性能向上に伴い、プリントスピードが大幅にあがり、また出力解像度が向上したことにより、従来の手間やコストが大幅に削減され、オフセット印刷市場へインクジェット業界が進出していくことが可能となりました。また、インクジェットプリンターは、当初は紙にプリントする用途が専らでありましたが、大判インクジェットプリンターの技術革新・高画質化に伴い、紙以外のアクリル素材、木材、衣類などの多種多様なあらゆる材料へのプリントが可能となり、ここ数年では、3Dプリントといった二次元から三次元へのプリントも可能になりました。このように「インクジェットプリント」がどんどん私たちの生活に近づき発展しつつあります。我々は「インクジェット」と調和し、より世の中に身近なところでお手伝いを行い、技術の進歩、業界の発展に全力を注ぎたいと考えております。

その中で当社では、年々多様化してきている顧客ニーズに対応するべく、大阪本店、東京本社、ニコール事業部（横浜）、名古屋営業所、福岡営業所において、100台以上の多種多様な業務用インクジェットプリンターや各種加工マシンを保有しております。また、100名を超える制作オペレーターを配置しインクジェット出力サービスを市場に展開しております。

当社の主な販売市場としましては、販売促進用POP・什器製品を主な商材としたセールスプロモーション市場、店舗・商業施設・展示会など屋外広告物で使用するサイン製品を商材としたサイングラフィックス市場、テーブルクロスやファブリック素材など布地プリント製品を商材としたテキスタイル市場、壁・窓・床を中心とした壁紙やカーテン、内装インテリア製品を商材とした内装インテリア市場の4つに区分されます。

なお、当社の事業は「インクジェット出力事業」の単一セグメントであるため、セグメント別の記載は省略しておりますが、以下、当社が提供する主たるサービスについては「販売促進用広告制作」と「生活資材・製品制作」の2つに分類され、その特徴は以下のとおりです。

#### (1) 販売促進用広告制作

販売促進用広告制作においては、広告代理店、広告制作会社、印刷会社、デザイン会社、屋外サイン業者等から発注される販売促進用広告物を制作しております。

##### 営業体制

営業部門は大阪、東京、横浜、名古屋、福岡に体制を置いております。原則として街の中心部に位置しており、例えば大阪では大阪市内という限られた地域に絞り、都心の利点を活かして非常に限られたエリア単位で営業部員をきめ細かく配置しながら、サービスを展開しております。

当社では、広い地域であらゆる業界からの受注を目指すのではなく、広告代理店、広告制作会社、印刷会社、デザイン会社、屋外サイン業者に的を絞り、そうした顧客が集中する都心部の狭い地域において受注占有率で地域NO.1になることを基本方針としております。

また、広告業界の特性として、広告代理店等が広告主から即応体制を求められるようになり、当社も即納体制を整備することが受注獲得の上で非常に重要になりました。このため、顧客から近い地域に制作拠点を設けることが顧客にとって非常に利便性が高く、安心して発注できるというメリットがあります。都心部エリア外に位置する広域エリアの顧客に関しては、広域エリア専任営業を配置し、受注獲得を行っております。さらに、インターネット経由による問い合わせに関しても専任窓口を配置し、ECサイトとWeb受注専用ページ(ランディングページ)を運用し、受注獲得を行っております。

## 制作体制

制作部門は、営業部門と同じく大阪、東京、横浜、名古屋、福岡に体制を置いております。主要な拠点において、24時間体制で生産を行っており、顧客からの短納期の注文や緊急案件を含め、様々な要望にも対応可能なサービス体制を構築しております。また、1箇所の拠点に受注が集中した場合においては、拠点間での連携制作を行い、生産機会の逸失を防ぐ体制をとっております。また、各拠点間での製品の品質差異を防ぐために、拠点間同士での色統一が可能となる測色システムを導入し、品質管理体制を強化しております。

当社では、制作体制の「アナログからデジタル化」を基本方針として掲げ、加工の機械化・高速化を図ることを重点的に行っております。最新鋭設備を調査し、加工のロボット化の仕組み化を加速させていきます。

また、東京本社には3Dスタジオを設立し、高精彩の立体造形製品や、形状確認用のモックアップ試作製造を行うことができるフルカラー立体造形サービスを展開しております。モデリングソフトやスキャナーも導入し、自社内で3Dデータの作成まで行える体制を取っております。



## 販売促進用広告製品の概要

店頭用セールスプロモーションツールや屋外広告サイン、展示会装飾、3D立体造形サービスなど、多種多様な販売促進用の広告製品を制作しております。





(2) 生活資材・製品制作

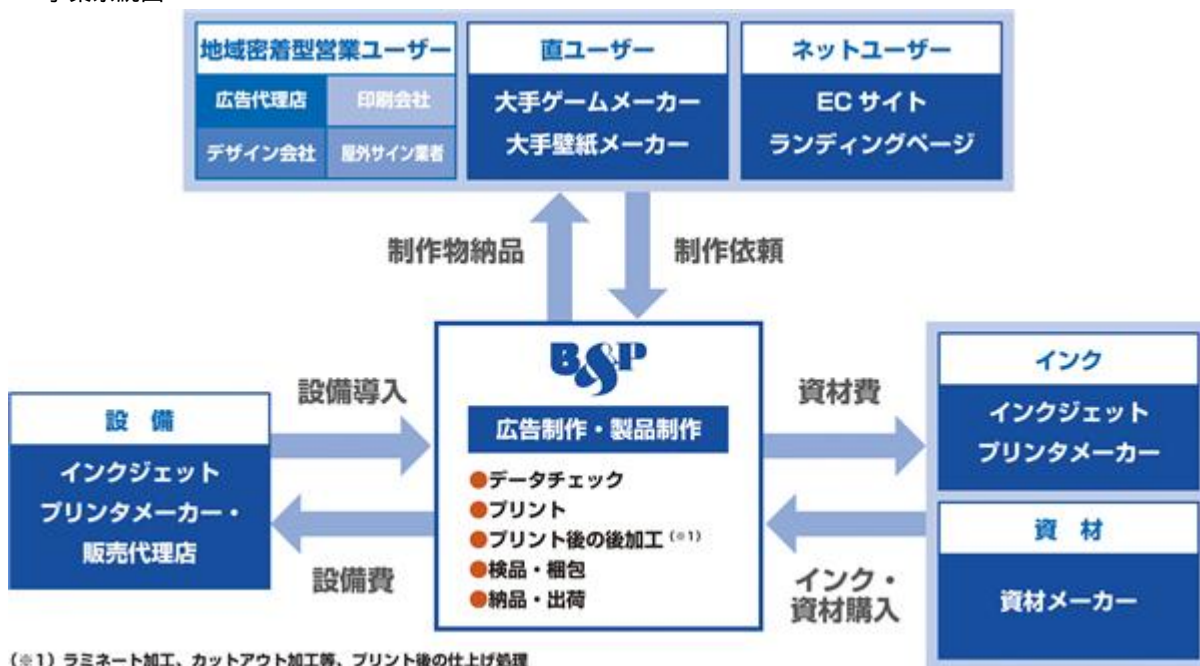
生活資材・製品制作においては、ゲーム機メーカーが取り扱うプリントシール機の外装カーテン、及びインテリアメーカーやインテリア専門商社が取り扱う壁紙や床材などの製品、並びにオリジナル壁紙製品などを制作しています。

これらの顧客からは、顧客の長期的な計画に基づいて当社に対する発注があるため、顧客ごとに専任の営業部員を配置し、顧客との関係を密にして顧客の動向を把握しております。また、製品の大量連続生産が必要となるため高い生産技術や、定期的な材料試験を通して適切な材料品質の管理体制を構築しております。

また、多店舗展開企業・病院・幼稚園・スーパー・ホテル・アミューズメント施設・オフィス・個人住宅などの内装インテリア業界へ、壁紙などのインクジェット出力製品のサービスを行います。



事業系統図



(※1) ラミネート加工、カットアウト加工等、プリント後の仕上げ処理

4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (千円)	主要な事業の内容	議決権の所有割合又は被所有割合 (%)	関係内容
(親会社) 英知興産(株)	兵庫県西宮市	10,000	有価証券の管理	被所有68.70	創業家の資産管理会社

(注) 有価証券届出書又は有価証券報告書を提出している会社はありません。



## 5【従業員の状況】

### (1) 提出会社の状況

2019年10月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
184 (9)	37.8	6.7	5,313,802

- (注) 1. 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数(パートタイマー)は、年間の平均人員を( )外数で記載しております。
2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。
3. 当社の事業はインクジェット出力事業の単一セグメントであるため、セグメント別の記載を省略しております。

### (2) 労働組合の状況

当社には、労働組合はありませんが、労使関係は円満に推移しております。

## 第2【事業の状況】

### 1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当事業年度末現在において、当社が判断したものであり、その達成を保証するものではありません。

#### (1) 経営方針

当社では、インクジェット技術を世の中、日本社会、市民生活の発展の為に普及させることを企業目標として「一、インクジェット技術を世の中、日本社会、市民生活の発展の為に普及させる 一、社会人として恥ずかしくない立派な人格、人間形成をめざす 一、我々の責務を果たし、生活を豊かにし世界一の出力企業をめざす」、企業理念として「より良い働きを通じて 全従業員の物心両面の幸せを創造し 社会へ貢献しよう」を掲げております。

また、「社員を喜ばし お客様を喜ばす」ことを事業理念としており、お客様からの様々なご要望に対して、即時、かつ細やかにお応えし、お客様からの信頼を得ることにより、売上拡大と収益性の向上を目指しております。

こうして当社の事業理念を浸透させ、事業基盤をより強化発展させることにより、広告産業を通して、日本社会、世の中を明るくするために社会貢献に寄与してまいります。

#### (2) 経営戦略

当社は顧客からの受注に基づき、業務用の大判インクジェットプリンターを使用し、プリント・加工・納品までを一貫して行うインクジェット出力事業を行っております。広告代理店、広告制作会社、印刷会社、デザイン会社等から発注される「販売促進用広告物の制作」、及びゲーム機メーカーが取り扱うプリントシール機の外装カーテン、並びにインテリアメーカーやインテリア専門商社が取り扱う内装壁紙や床材等の「生活資材・製品制作」を主たる事業としております。大阪、東京、横浜、名古屋、福岡に拠点を置き、得意先様からの様々な要望にお応えするため、プリンターや加工マシンの生産体制の拡大と顧客・販路の拡大をこれまで行ってまいりました。24時間生産体制にて、短納期の注文や緊急案件にも対応できることが当社の強みでもあります。「短納期」と「ワンストップサービス」をキーワードに、他社よりも質の高いサービス、付加価値の高いサービスを提供することが、当社の主たる経営戦略であり、以下の二つを中期経営方針として掲げております。

##### 基幹収益事業の加速・拡大

収益性が高く、最も得意とする「広告業界」への事業領域を加速・拡大させる。

##### 成長事業への積極的投資

インテリア製品を主とする「生活産業」への事業推進と、3Dプリントや建材製品を主とする「工業製品」への事業推進を積極的に行っていく。

#### (3) 経営上の目標達成状況を判断するための客観的な指標等

当社は、継続的な事業拡大及び、持続的な利益成長の観点から成長性や効率性の向上に取り組んでおり、「売上高」と「売上高成長率」及び「売上高経常利益率」を重要な経営指標として位置づけており、継続的な利益体質を構築することで売上高成長率10%を目標としております。

#### (4) 経営環境

我が国経済は、企業収益や雇用・所得環境の改善を背景として緩やかな景気回復の兆しはあるものの、米中貿易摩擦、英国EU離脱問題等海外の政治経済情勢の影響や消費税増税に伴う国内消費の落ち込みへの懸念もあり、依然として先行き不透明な状況が続いております。広告印刷業界におきましては、他社との受注獲得競争が続き、それに伴う価格競争の激化などの影響を受け、全体を通しては、経営環境は厳しさを増しております。

このような状況の中、当社は、お客様のニーズに応えるべく、営業力・提案力の強化を更に図り、これにより経営成績が好調な主力広告主から、当社の顧客である広告代理店へ発注された案件の確保に努めてまいります。さらに付加価値の高い分野の新規顧客の開拓深耕にも一層注力していき、事業拡大を加速させてまいります。

また、当社といたしましては、制作体制の「アナログからデジタル化」を基本方針として掲げ、加工の機械化・高速化を図ることを重点的に行っております。最新鋭設備を調査し、加工のロボット化の仕組み化を加速させていきます。継続的に生産設備を更新し、生産効率を更に向上させることにより、価格や印刷品質における競争力を維持し、更に高めてゆく必要があるものと考えております。また、製品制作を各事業所に適切に割り振ることにより設備の稼働率を向上させ、収益性の改善にも努め、強固な経営基盤を築き、事業の拡大に努めてまいります。

#### (5) 事業上の対処すべき課題

このような経営方針の下、当社が対処すべき主な課題は、以下の項目と認識しております。

##### 内部管理体制の強化

当事業の継続的な発展のためには、コーポレート・ガバナンス機能の強化は重要な問題であり、財務報告の信頼性を確保するため、内部統制システムの適切な運用が重要であると認識しております。コーポレート・ガバナンスに関しては、ステークホルダーに対して経営の適正性や健全性を確保しつつも、さらに効率化された組織体制の構築に向けて内部管理体制の強化に取り組んでまいります。

##### コンプライアンス体制の強化

当社は、法令、定款及び社内規程等の遵守は勿論のこと、日々の業務を適正かつ確実に遂行しており、誠実な姿勢を企業行動の基本として、事故やトラブルを未然に防止する取り組みを強化してまいります。今後、更なる事業拡大と企業価値の向上に向けて、引き続き日常業務における関連法令の遵守を徹底するとともに、社長室を中心とした定期的なコンプライアンス研修の開催、各種取引の健全性の確保、情報の共有化、再発防止策の策定などを行い、また、厳正な管理による社会の「公器」としての責任を重視した透明性のある管理体制の構築を図ってまいります。

##### 認知度の向上

当社が今後も成長を続けていく上では、当社の認知度を向上させていくことが必要不可欠であると考えております。展示会の出展や参加、Web広告を活用した露出等、販売促進活動を積極的に実施していく方針です。

##### 営業力の強化

当社が、事業拡大を進めていくにあたっては営業体制の強化が欠かせません。社内の営業人員の育成を加速させつつ、有能な人員の採用を強化していきます。また、協業先(得意先・仕入先)とのビジネス提携も積極的に行い、販売チャネルの拡充及び、営業活動により、より多くの新規顧客の獲得と既存顧客を深耕していくことで事業規模の大幅な拡大を図ってまいります。

##### 生産体制・技術力の強化

当社が、事業拡大を進めていくにあたっては生産体制の強化と技術力の向上が欠かせません。社内の制作人員の育成を加速させると同時に、高度かつ専門的な知識を有する職種に関しては、有能な専門職の採用を強化していきます。また、方針として掲げている「アナログからデジタル化」を積極的に進めていくためにも、最新鋭機器を調査し、加工の機械化・高速化を図ると同時に、加工のロボット化の仕組み化を加速させていきます。

また、大阪・東京の都心部に自社のインクジェットファクトリーを持つことにより、自由度が高くなり、従来よりもさらに高いサービスを顧客に提供することが実現できると考えております。

## 人材の確保と育成

当社は創業以来、優秀な人材を継続的に確保し、人格形成を育成することが最も重要な他社との差別化と認識しております。そのために当社では、従業員のプロフェッショナル化としてインクジェットに関する専門知識の習得を求めるだけでなく、すべての業務に携わる従業員に対し、自己研鑽を重ね、高い専門性を身に着けること、自律的に行動していくことを求めています。これにより、従業員個々の能力向上を図り、当社の人材レベルの向上、ひいてはサービスの質向上、維持に繋げていきたいと考えております。その実現には、人材に対する投資が必要不可欠であると考え、毎年策定する人員計画に教育研修を盛り込み、継続して人材のレベルアップに取り組んでおります。また併せて、経営理念やコンプライアンスに基づいた業務運営体制の徹底のため、リスク認識などに対する全社員の意識向上にも努めてまいります。

## 2【事業等のリスク】

本書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある主な事項には、以下のものがあります。

なお、文中の将来に関する事項は、当事業年度末現在において当社が判断したものであります。

### (1) 特定取引先への依存度が高いことについて

当社の顧客構成において、取引先10社の売上が売上高の39%を占めております。当社では、特定取引先へ依存しない経営方針をとり売上高の取引先による偏りを低減させるよう努めております。今後も取引先との良好な関係を継続してまいります。当該顧客企業の経営方針に変更が生じた場合、販売状況に影響が生じ、当社の経営成績に重要な影響を及ぼす可能性があります。

### (2) 競合について

当社の主要事業であるインクジェット出力事業は、特殊な技術や特許が不要であり、比較的参入障壁が低い事業です。こうしたことから、多数の競合会社が存在し今後一層の競争激化が生じる可能性があります。当社においては、1985年10月から事業運営している経験とノウハウの蓄積を活かしながら競争力の維持向上に努めております。しかしながら、競合他社に対する優位性が確立できる保証はなく、競合の結果、当社の経営成績に重要な影響を及ぼす可能性があります。

### (3) 情報漏洩について

インクジェット出力事業はデジタル化の進展等により情報システムの重要性が高まっており、当社ではセキュリティの充実及び守秘義務の徹底を図ってきました。個人情報保護に関しては、2010年にプライバシーマーク認証を取得し、適切な管理の徹底、内部監査によるチェック等を行い、厳格な管理体制の構築が行われております。しかしながら、不測の事態により、個人情報が外部に流出した場合には、当社に対する損害賠償の請求や信用力の失墜により、当社の経営成績に重要な影響を及ぼす可能性があります。

### (4) 人材の確保について

国内において少子高齢化による労働力人口の減少が進む中、あらゆる業界で就業者不足となっており、今後も人材不足が継続すると予測されております。当社の人事部門は、年間通じて人材採用活動を行い、その雇用の継続に努めております。しかしながら、人材の確保が充分に行えない場合、生産力の低下による納期遅延や品質低下が生じ、顧客からの信用低下などで当社の経営成績に重要な影響を及ぼす可能性があります。

### (5) 経済動向による影響について

当社の経営成績については、日本国内市場における広告宣伝活動の需要に大きく影響を受けます。国内経済の低迷が長期化した場合は、企業収益の減少に伴い、企業は広告宣伝活動を縮小する傾向にあります。当社ではこれらの経済動向を注視し適時対策を講じておりますが、このような経営環境の変化が予想を超えた場合、当社の経営成績に重要な影響を及ぼす可能性があります。

### (6) 法令規制について

法令の遵守を基本として事業を進めておりますが、廃棄物処理責任、環境・個人情報保護関連、税制関連等において、さまざまな法的規制を受けております。当社といたしましては各主管部門と管理部門が連携し、関連諸法規の順守に万全の体制で臨んでおりますが、今後更にその規制が強化されることも考えられます。そのような場合、事業活動に対する制約の拡大やコストの増加も予想され、当社の事業活動に重要な影響を及ぼす可能性があります。

### (7) M & Aにおけるリスク

当社は、高収入体制を確立するため、当社の事業内容と一致し、かつ成長が見込まれる会社とのM & Aを推進してまいります。M & Aの実施に当たっては、市場動向や顧客のニーズ、相手先企業の経営成績、財務状況、市場競争力等を十分に考慮し進めるべく努めておりますが、事前の調査・検討に不足や見落としがあったり、買収した事業が計画通りに展開することができず、投下した資金の回収ができない場合や追加的費用が発生した場合等において、当社の経営成績や成長見通し及び事業展開等に重要な影響を及ぼす可能性があります。

( 8 ) 新株予約権の行使による株式価値の希薄化について

当社は長期的な企業価値向上のため、役員及び従業員に対しインセンティブとして新株予約権を付与しております。当事業年度末現在、新株予約権による潜在株式総数は69,800株であり、発行済株式総数2,300,000株の3.0%に相当します。これらの新株予約権が行使された場合、当社株式が新たに発行され、既存の株主が有する株式の価値及び議決権割合が希薄化する可能性があります。

( 9 ) 材料費の上昇に係るリスク

当社が製造で使用するインクやインクジェット用紙は、原油価格の高騰により価格が上昇することがあります。当社では、取引先材料メーカーを1社に限定せず、複数社との取引を継続しており、材料価格の見直しを適宜行っております。しかしながら、これら原材料の価格上昇分を製品価格に十分に転嫁できない場合、あるいは材料転換による採算の改善が困難な場合、当社の経営成績及び財務状況に重要な影響を及ぼす可能性があります。

( 10 ) 自然災害のリスク

当社は災害による生産体制への影響を最小化するため、大阪・東京・横浜・名古屋・福岡に生産拠点を構え、その分散化によりリスクの低減を図っておりますが、災害による影響を完全に防止できる保証はありません。自然災害等により、設備や従業員に大きな被害を受け、その一部又は全部の操業が中断し、生産及び出荷が遅延する可能性があります。また、被害を被った設備等の修復のために多額の費用が発生し、結果として、当社の事業活動、経営成績及び財務状況に重要な影響を及ぼす可能性があります。



### 3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

#### (1) 経営成績等の状況の概要

当事業年度における当社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下、「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

#### 財政状態の状況

##### (流動資産)

当事業年度末における流動資産の残高は、2,875,329千円（前事業年度末は2,138,042千円）となり、737,286千円増加いたしました。その主な要因といたしましては、仕掛品が52,264千円減少したものの、営業活動による資金獲得や株式の上場に伴う資金調達により、前事業年度末と比べ現金及び預金が796,959千円増加したことによるものであります。

##### (固定資産)

当事業年度末における固定資産の残高は、285,015千円（前事業年度末は313,514千円）となり、28,499千円減少いたしました。これは主に、外形標準課税が適用されたことに伴う法定実効税率の低下等に起因して繰延税金資産が28,710千円減少したことによる減少であります。

##### (流動負債)

当事業年度末における流動負債の残高は、429,352千円（前事業年度末は487,168千円）となり、57,815千円減少いたしました。その主な要因といたしましては、未払消費税等が84,126千円増加したものの、未払法人税等が54,943千円、買掛金が39,416千円、賞与引当金が36,232千円それぞれ減少したことによるものであります。

##### (固定負債)

当事業年度末における固定負債の残高は、142,428千円（前事業年度末は138,947千円）となり、3,481千円増加いたしました。これは、前事業年度末と比べリース債務が4,675千円減少したものの、役員退職慰労引当金が4,952千円、資産除去債務が3,204千円増加したことによるものであります。

##### (純資産)

当事業年度末における純資産の残高は、2,588,562千円（前事業年度末は1,825,441千円）となり、763,120千円増加いたしました。これは、株式の上場に伴う増資により資本金と資本準備金がそれぞれ276,000千円増加したこと、配当の支払はあったものの当期純利益の計上により利益剰余金が211,120千円増加したことによるものであります。

## 経営成績の状況

当事業年度における我が国経済は、企業収益や雇用・所得環境の改善を背景として緩やかな景気回復の兆しはあるものの、米中貿易摩擦、英国EU離脱問題等海外の政治経済情勢の影響や消費税増税に伴う国内消費の落ち込みへの懸念もあり、依然として先行き不透明な状況が続いております。

このような状況の中、当社はお客様からの信頼をより高めるべく、引き続き営業体制・制作体制の両方の強化を図ってまいりました。当事業年度においては、2018年12月に主に広幅印刷物を扱う江東事業所をニコール事業部（横浜市神奈川区）に統合し、当統合に併せて広幅インクジェットプリンターを最新型に更新し、広幅印刷の機能を強化いたしました。また、2018年11月に池袋営業所、2019年4月に福岡営業所を開設し、未開拓営業エリアにおいて地域に密着した営業・サポート体制を構築し、確実に迅速な対応・サービス提供を開始いたしました。

しかしながら、当社の主力事業である販売促進用広告制作に関し、第4四半期において当社顧客である広告代理店等から、特に家電関係の販売促進用広告物の受注が落ち込んだため、当社のもう一つの事業である生活資材・製品制作分野での売上を伸ばしたものの、売上高は3,011,486千円（前期参考金額比0.9%増加）と微増にとどまりました。

また、営業を中心に人員強化を行ったことによる人件費の増加、設備更新による減価償却費の増加、2019年7月の東証マザーズ市場への上場に伴う支払報酬等の発生、並びに、外形標準課税の新たな適用に伴う租税公課の増加があったため製造原価と販売費及び一般管理費が増加し、営業利益は426,649千円（前期参考金額比29.5%減少）、経常利益は426,218千円（前期参考金額比29.3%減少）となりました。そして、機械及び装置の売却による固定資産売却益12,999千円を特別利益に計上したことにより、当期純利益は311,120千円（前期参考金額比29.5%減少）となりました。

なお、経営成績の前期比較については、比較可能性を確保する観点から、2017年10月21日から2018年10月20日までの連結損益計算書の金額を参考金額として比較を行っております。これは、前事業年度の単体損益計算書には、2017年10月期において連結子会社であった株式会社ニコールを2018年7月21日付で吸収合併したため、吸収合併実施前（2017年10月21日から2018年7月20日まで）の株式会社ニコールの損益が含まれておらず、また、前事業年度は決算日変更による変則決算を行っているため、前事業年度の会計期間は2017年10月21日から2018年10月31日までとなっているためです。

（%表示は対前期参考金額増減率）

	売上高		営業利益		経常利益		当期純利益	
	千円	%	千円	%	千円	%	千円	%
2019年10月期実績	3,011,486	0.9	426,649	29.5	426,218	29.3	311,120	29.5
2018年10月期参考	2,985,724	-	605,306	-	602,646	-	441,154	-

（注）2018年10月期参考は、2017年10月21日から2018年10月20日までの連結損益計算書の金額であります。

なお、当社はインクジェット出力事業の単一セグメントであります。したがって、セグメント別の経営成績の記載はしていません。

## キャッシュ・フローの状況

当事業年度末における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）の残高は、2,154,550千円となり、前事業年度末から796,959千円増加いたしました。

当事業年度における各キャッシュ・フローの状況は、次のとおりです。なお、前事業年度は連結キャッシュ・フロー計算書を作成しており、単体のキャッシュ・フロー計算書は作成しておりませんので、前事業年度との比較は実施しておりません。

## （営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動による資金の増加は439,483千円となりました。これは、法人税等の支払額172,958千円等の資金減少要因があったものの、税引前当期純利益439,203千円、減価償却費89,268千円、未払消費税等の増加額84,126千円等の資金増加要因があったことによるものであります。

## （投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動による資金の減少は71,218千円となりました。これは主に、有形固定資産の取得による支出が80,915千円あったことによるものであります。

## （財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動による資金の増加は428,694千円となりました。これは配当金の支払額100,000千円、リース債務の返済による支出23,305千円の資金減少要因があったものの、株式の上場に伴う公募増資により552,000千円の収入があったことによるものであります。

生産、受注及び販売の実績

当社はインクジェット出力事業の単一セグメントであるため、セグメント情報に関連付けた記載はしておりません。

イ．生産実績

当社の事業は、提供する商品の性格上、生産実績の記載になじまないため、当該記載を省略しております。

ロ．受注実績

当社は受注生産を行っておりますが、受注から販売までの期間が短いため、記載を省略しております。

ハ．販売実績

区分	第33期連結会計年度 (自 2017年10月21日 至 2018年10月31日)		第34期事業年度 (自 2018年11月1日 至 2019年10月31日)	
	金額(千円)	前年同期比(%)	金額(千円)	前年同期比(%)
販売促進用広告制作	2,623,718	7.7	2,550,164	2.8
生活資材・製品制作	443,478	4.3	461,322	4.0
合計	3,067,197	5.8	3,011,486	1.8

(注) 1. 金額は販売価額によっており、消費税等は含まれておりません。

2. 第33期は連結財務諸表を作成していたため、連結ベースの金額を記載しております。また、第33期において、決算日を10月20日から10月31日に変更しておりますが、第34期事業年度の前年同期比は単純比較した数値を記載しております。

3. 主な相手先の販売実績および当該販売実績の総販売実績に対する割合は次のとおりであります。

相手先	第33期連結会計年度 (自 2017年10月21日 至 2018年10月31日)		第34期事業年度 (自 2018年11月1日 至 2019年10月31日)	
	販売高(千円)	割合(%)	販売高(千円)	割合(%)
フリーー(株)	357,992	11.7	333,158	11.1

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当事業年度末現在において判断したものであります。

重要な会計方針及び見積り

当社の財務諸表は、我が国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されています。当社の財務諸表で採用する重要な会計方針は、「第5 経理の状況 1 財務諸表等(1)財務諸表 注記事項 重要な会計方針」に記載しております。

この財務諸表の作成にあたっては、過去の実績や状況に応じ合理的と考えられる様々な要因に基づき見積り及び判断を行っておりますが、不確実性が内在しているため、将来生じる実際の結果と異なる可能性があります。

当事業年度の経営成績の分析

前事業年度において連結子会社であった株式会社ニコールを2018年7月21日付で吸収合併したため、前事業年度の単体損益計算書には吸収合併実施前(2017年10月21日から2018年7月20日まで)の株式会社ニコールの損益は含まれておりません。また、前事業年度は決算日変更による変則決算を行っているため、前事業年度の会計期間は2017年10月21日から2018年10月31日までとなっております。

よって、当事業年度の損益と前事業年度の単体損益を単純比較することは適切ではなく、参考数値として2017年10月21日から2018年10月20日までの連結損益計算書の金額(以下、「前期参考金額」といいます。)と比較した内容を記載しております。

イ. 売上高

当事業年度の売上高は、3,011,486千円となり、前期参考金額(2,985,724千円)と比較して0.9%増加にとどまりました。主な要因は、営業拠点の拡大と生活資材・製品制作分野での取引拡大による増収効果があったものの、当社の主力事業である販売促進用広告制作において、当社顧客である広告代理店等から、特に家電関係の販売促進用広告物の受注が落ち込み、売上が思うように伸びなかったためであります。

ロ. 売上原価、売上総利益

当事業年度の売上原価は、1,772,330千円となり、前期参考金額(1,681,855千円)と比較して5.4%増加しました。主な要因は、制作部門の人員強化により労務費が24,573千円増加したことや設備更新により減価償却費が20,525千円増加したことによるものであります。

この結果、当連結会計年度の売上総利益は、1,239,156千円となり、前期参考金額(1,303,869千円)と比較して5.0%減少しました。

ハ. 販売費及び一般管理費、営業利益

当事業年度の販売費及び一般管理費は、812,507千円となり、前期参考金額(698,562千円)と比較して16.3%増加しました。主な要因は、営業・管理部門の人員強化に伴い従業員に係る人件費が58,867千円増加したことや東証マザーズ市場への上場に伴い支払報酬等が11,676千円増加したこと、外形標準課税適用に伴い租税公課が19,920千円増加したことによるものであります。

この結果、当連結会計年度の営業利益は、426,649千円となり、前期参考金額(605,306千円)と比較して29.5%減少しました。

ニ. 営業外収益、営業外費用、経常利益

当事業年度の営業外収益は798千円、営業外費用は1,229千円となりました。リース債務の返済が進み支払利息が減少傾向にあります。

この結果、当事業年度の経常利益は、426,218千円となり、前期参考金額(602,646千円)と比較して29.3%減少しました。

ホ. 特別損益、税金費用、当期純利益

当事業年度は、機械及び装置を売却したことに伴う固定資産売却益12,999千円を特別利益に計上し、機械及び装置を除却したことに伴う固定資産除却損14千円を特別損失に計上しました。また、課税所得の減少や税額控除の適用により、税金費用は128,082千円となり、前期参考金額(160,395千円)と比較して20.1%減少しました。

以上の結果、当期純利益は、311,120千円となり、前期参考金額(441,154千円)と比較して29.5%減少しました。

キャッシュ・フローの状況の分析

キャッシュ・フローの状況の分析につきましては、「第2 事業の状況 3 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析」をご参照ください。

#### 資本の財源及び資金の流動性

当社は、資金の源泉と流動性を安定的に確保することを基本方針としております。営業活動によるキャッシュ・フロー及び増資によって得られた資金の運用につきましては、設備投資資金・新規拠点設立費用・ECサイト用ITシステム構築費用・成長のための投資資金に充当する予定であります。

#### 経営方針、経営戦略、経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

当社は、重要な経営指標として「売上高」と「売上高成長率」及び「売上高経常利益率」を掲げ、売上高成長率10%を目指しております。当事業年度の売上高は3,011,486千円となり、前期参考金額と比較した売上高成長率は0.9%にとどまりました。売上高経常利益率は14.2%となり、前期参考金額で計算したものと比べて6.0%減少しました。顧客数アップとリピート数アップでこの状況を改善し、今後この3つの指標を重視して経営を行うことにより、企業の成長性及び効率性の確保を図ってまいります。

#### 経営成績に重要な影響を与える要因について

当社の経営成績は、特定取引先への依存、同業他社との競合、人材の確保等、様々な要因の変動による影響を受ける可能性があります。このため、当社事業を取り巻く環境に注視し、内部統制システムの強化等によりこれらのリスク要因に対応してまいります。

#### 経営者の問題意識と今後の方針について

今後の見通しにつきましては、我が国経済は緩やかな景気回復が続くことが期待されておりますが、国際的な貿易摩擦の深刻化や、アジアにおける政情・経済不安により、海外リスクが膨らみ依然として先行き不透明な情勢が続くものと予測されます。

当社を取り巻く環境は、引き続き、他社との受注獲得競争が続き、それに伴う価格競争の激化などの影響を受け、経営環境は厳しさを増すものと考えます。こうした課題に向けて、中期経営計画（2020年10月期からの3事業年度）として、従来の広告物制作を行う「基幹収益事業」の成長を更に加速させ、事業規模を更に拡大させます。また、従来の広告物制作に加えて、インテリア業界向けの生活産品や、3D制作物と建材製品を主とする工業製品の「成長事業」へ積極的な投資を行います。具体的には、「営業エリアの全国展開」、「Webマーケティング機能の強化」、「生産体制のオートメーション化」、「インテリア業界への進出加速」、「3Dプリント事業の成長加速」、「建材市場への進出」、「仕入統一化による原価低減の促進」、「M&A戦略の推進」を進めてまいります。

「営業エリアの全国展開」としては、福岡営業所（2019年4月開設）、名古屋営業所（2019年11月開設）の本格稼働により、販路を拡大してまいります。

「Webマーケティング機能の強化」としては、専任の担当者を増強しており、SEO等を通じた新規受注の獲得と提案営業によるリピート受注に繋げてまいります。

「生産体制のオートメーション化」としては、「生産自動装置」を導入し生産能力を増強することを目指します。

「インテリア業界への進出加速」としては、お客様に高品質な壁紙製品を1mからの小ロット、短納期で提供いたします。

「3Dプリント事業の成長加速」としては、1個単位の小ロット生産が可能であり、テストマーケティングや少量生産へのニーズに応えます。

「建材市場への進出」としては、インクジェットの新しい成長市場である建材市場に当社のインクジェット技術を展開できるよう、営業活動及び生産設備の導入を進めます。

「仕入統一化による原価低減の促進」としては、各部署間で情報共有を行い、仕入材料の統一化によるボリュームディスカウントやランニングコストの低い設備への移行を進め、原価低減を加速します。

「M&A戦略の推進」としては、インクジェット出力会社、オフセット・シルク印刷会社、3Dプリント関連会社、インターネット関連会社など、コア事業であるインクジェット出力事業の強化を軸に、成長を加速できる企業とのM&Aを行い、当社の経営手法を導入し高収益体制の企業グループの確立を目指します。

#### 4【経営上の重要な契約等】

特記すべき事項はありません。

#### 5【研究開発活動】

特記すべき事項はありません。

### 第3【設備の状況】

#### 1【設備投資等の概要】

当事業年度の設備投資につきまして主要なものは、建物についてワイドフォーマットスタジオ開設に伴う設備工事7,000千円の投資があり、また、機械及び装置についてはコストダウン・生産性・品質向上を目的としたインクジェットプリンターの更新等で総額72,716千円の投資があり、いずれも自己資金で対応いたしました。生産能力に重要な影響を及ぼすような設備の売却・撤去はありません。

なお、当社はインクジェット出力事業の単一セグメントであるため、セグメント別の記載を省略しております。

#### 2【主要な設備の状況】

2019年10月31日現在

事業所名 (所在地)	設備の内容	帳簿価額					従業員数 (名)
		建物 (千円)	機械及び装置 (千円)	リース資産 (千円)	その他 (千円)	合計 (千円)	
大阪本店 (大阪市西区)	インクジェットプリンター・加工機	572	1,579	681	4,937	7,770	53
東京本社 (東京都港区)	インクジェットプリンター・加工機	1,423	10,504	1,214	1,226	14,368	73 (1)
ニコール事業部 (横浜市神奈川区)	インクジェットプリンター・加工機	16,062	47,472	20,358	85	83,979	55 (8)
名古屋営業所 (名古屋市中村区)	制作用機材	-	221	-	76	298	-
福岡営業所 (福岡市博多区)	インクジェットプリンター・加工機	-	-	801	351	1,152	3

(注) 1. 現在休止中の主要な設備はありません。

2. 帳簿価額のうち「その他」は、車両運搬具、工具、器具及び備品、その他の有形固定資産、ソフトウェアの合計であります。

3. 名古屋営業所は2019年11月1日より営業を開始しております。

4. 従業員数の( )は、臨時従業員数を外書しております。

5. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

6. 当社はインクジェット出力事業の単一セグメントであるため、セグメント情報に関連付けた記載はしていません。

7. 上記の他、他の者から賃借している主要な設備として以下のものがあります。

事業所名 (所在地)	設備の内容	床面積 (㎡)	年間賃借料 (千円)
大阪本店 (大阪市西区)	建物設備	1,200.58	35,511
東京本社 (東京都港区)	建物設備	1,472.94	76,948
ニコール事業部 (横浜市神奈川区)	建物設備	1,963.02	47,575
名古屋営業所 (名古屋市中村区)	建物設備	95.17	153
福岡営業所 (福岡市博多区)	建物設備	52.63	792



### 3【設備の新設、除却等の計画】

#### (1) 重要な設備の新設等

事業所名 (所在地)	設備の内容	投資予定金額		資金調達 方法	着手及び完了予定年月		完成後 の増加 能力
		予算総額 (千円)	既支払額 (千円)		着手	完了	
大阪本店 (大阪市西区)	インクジェットプ リナー・加工機	11,260	-	自己資金	2019年11月	2020年2月	(注)3
		2,200	-	自己資金	2020年11月	2021年10月	(注)3
		35,000	-	自己資金	2021年11月	2022年10月	(注)3
	業務効率化ソフト	2,400	-	自己資金	2020年2月	2020年2月	(注)3
東京本社 (東京都港区)	インクジェットプ リナー・加工機	2,340	-	自己資金	2019年11月	2020年10月	(注)3
	業務効率化ソフト	2,400	-	自己資金	2020年1月	2020年1月	(注)3
		12,200	-	自己資金	2021年11月	2022年10月	(注)3
ニコール事業部 (横浜市神奈川区)	インクジェットプ リナー・加工機	7,700	-	自己資金	2019年12月	2019年12月	(注)3
		49,500	-	自己資金	2020年11月	2021年10月	(注)3
		2,800	-	自己資金	2021年11月	2022年10月	(注)3
	業務効率化ソフト	2,400	-	自己資金	2020年2月	2020年2月	(注)3
名古屋営業所 (名古屋市中村区)	インクジェットプ リナー・加工機	10,100	-	自己資金	2019年11月	2019年11月	(注)3
福岡営業所 (福岡市博多区)	インクジェットプ リナー・加工機	1,700	-	自己資金	2019年11月	2019年11月	(注)3

(注)1. 当社の事業はインクジェット出力事業の単一セグメントであるため、セグメント別の記載を省略しております。

2. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

3. 完成後の増加能力については、計数的把握が困難なため、記載を省略しております。

#### (2) 除却等

生産能力に重大な影響を与える除却等はありません。

## 第4【提出会社の状況】

### 1【株式等の状況】

#### (1)【株式の総数等】

##### 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	8,000,000
計	8,000,000

##### 【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数 (株) (2019年10月31日)	提出日現在発行数(株) (2020年1月30日)	上場金融商品取引所名又は登録認可金融商品取引業協会名	内容
普通株式	2,300,000	2,300,000	東京証券取引所 (マザーズ)	完全議決権株式であり、権利内容に何ら制限のない当社における標準となる株式であります。なお、単元株式数は100株であります。
計	2,300,000	2,300,000	-	-

(2)【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

決議年月日	2018年9月27日
付与対象者の区分及び人数(名)	当社取締役 3 当社使用人 90
新株予約権の数(個)	70,000 [69,600]
新株予約権の目的となる株式の種類、内容及び数(株)	普通株式 70,000 [69,600] (注)1
新株予約権の行使時の払込金額(円)	1,080 (注)2
新株予約権の行使期間	自 2021年10月21日 至 2028年9月20日
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円)	発行価格 1,080 資本組入額 540
新株予約権の行使の条件	新株予約権者は、権利行使時においても、当社又は当社子会社の取締役、監査役、従業員又は顧問、社外協力者その他これに準ずる地位を有していなければならない。ただし、新株予約権者が任期満了により退任又は定年退職した場合、あるいは取締役会が正当な理由があると認めた場合は、この限りではない。 新株予約権の行使は、当社普通株式に係る株式がいずれかの金融商品取引所に上場することを条件とする。 その他の行使の条件は、当社と新株予約権者との間で締結する新株予約権割当契約の定めるところによる。
新株予約権の譲渡に関する事項	新株予約権について譲渡、担保権の設定、その他一切の処分をすることができないものとする。
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	(注)3

当事業年度の末日(2019年10月31日)における内容を記載しております。当事業年度の末日から提出日の前月末現在(2019年12月31日)にかけて変更された事項については、提出日の前月末現在における内容を[ ]内に記載しており、その他の事項については当事業年度の末日における内容から変更はありません。

(注)1. 株式分割(株式無償割当を含む。)又は株式併合を行う場合、次の算式により新株予約権の目的となる株式の数を調整するものとする。ただし、係る調整は、新株予約権のうち、当該時点で権利行使されていない新株予約権の目的となる株式の数について行われ、調整の結果生じる1株未満の端数については、これを切り捨てる。

$$\text{調整後株式数} = \text{調整前株式数} \times \text{分割・併合の比率}$$

また、当社が吸収合併、新設合併、吸収分割、新設分割、株式交換もしくは株式移転を行う場合又はその他やむを得ない事由が生じた場合には、新株予約権の目的となる株式の数は、合理的な範囲で調整されるものとする。

2. 新株予約権の行使に際して出資される財産の価額は、1株当たり払込金額(以下「行使価額」という。)1,080円に新株予約権の目的となる株式の数を乗じた金額とする。なお、当社が株式分割(株式無償割当を含む。)又は株式併合を行う場合、次の算式により行使価額を調整し、1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{1}{\text{分割・併合の比率}}$$

また、当社が行使価額を下回る払込金額で募集株式の発行又は自己株式の処分を行う場合(新株予約権の行使に基づく株式の発行・処分を除く。)は、次の算式により行使価額を調整し、調整により生じる1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \frac{\text{既発行株式数} \times \text{調整前行使価額} + \text{新規発行株式数} \times 1 \text{株当たり払込金額}}{\text{既発行株式数} + \text{新規発行株式数}}$$

上記算式において「既発行株式数」とは、当社の発行済株式総数から当社が保有する自己株式数を控除した数とし、自己株式の処分を行う場合には「新規発行」を「自己株式の処分」、「1株当たり払込金額」を「1株当たり処分金額」と読み替えるものとする。

さらに、上記のほか、当社が吸収合併、新設合併、吸収分割、新設分割、株式交換もしくは株式移転を行う場合又はその他やむを得ない事由が生じた場合には、行使価額は、合理的な範囲で調整されるものとする。

3. 当社が合併（当社が合併により消滅する場合に限る。）、吸収分割、新設分割、株式交換又は株式移転（以上を総称して以下「組織再編行為」という。）をする場合において、組織再編行為の効力発生日において残存する新株予約権（以下「残存新株予約権」という。）の新株予約権者に対し、それぞれの場合につき、会社法第236条第1項第8号のイからホまでに掲げる株式会社（以下「再編対象会社」という。）の新株予約権を以下の条件に基づきそれぞれ交付することとする。この場合においては、残存新株予約権は消滅し、再編対象会社は新株予約権を新たに発行するものとする。ただし、以下の条件に沿って再編対象会社の新株予約権を交付する旨を、吸収合併契約、新設合併契約、吸収分割契約、新設分割計画、株式交換契約又は株式移転計画において定めた場合に限るものとする。

(1) 交付する再編対象会社の新株予約権の数

組織再編行為の効力発生の時点において残存する募集新株予約権の新株予約権者が保有する新株予約権の数と同一の数をそれぞれ交付するものとする。

(2) 新株予約権の目的である再編対象会社の株式の種類

再編対象会社の普通株式とする。

(3) 新株予約権の目的である再編対象会社の株式の数

組織再編行為の条件等を勘案のうえ、（注）1に準じて決定する。

(4) 新株予約権の行使に際して出資される財産の価額

交付される各新株予約権の行使に際して出資される財産の価額は、組織再編行為の条件等を勘案のうえ、（注）2で定められた行使価額を調整して得られる再編後払込金額に上記（3）に従って決定される当該新株予約権の目的である再編対象会社の株式の数を乗じて得られる金額とする。

(5) 新株予約権を行使することができる期間

新株予約権を行使できる期間の開始日と組織再編行為の効力発生日のうちいずれか遅い日から、新株予約権を行使することができる期間の満了日までとする。

(6) 新株予約権の行使の条件

「新株予約権割当契約」に準じて決定する。

(7) 増加する資本金及び資本準備金に関する事項

「新株予約権割当契約」に準じて決定する。

(8) 譲渡による新株予約権の取得の制限

譲渡による新株予約権の取得については、再編対象会社の承認を要するものとする。

(9) 新株予約権の取得事由

「新株予約権割当契約」に準じて決定する。

#### 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

#### 【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総数 増減数(株)	発行済株式総 数残高(株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金増 減額(千円)	資本準備金残 高(千円)
2018年4月20日 (注)1	1,999,800	2,000,000	-	10,000	-	-
2019年7月23日 (注)2	300,000	2,300,000	276,000	286,000	276,000	276,000

(注)1. 2018年3月30日の取締役会決議により、2018年4月20日付で普通株式1株につき10,000株の割合をもって株式分割を行っております。

2. 有償一般募集(ブックビルディング方式による募集)

発行価格 2,000円  
発行価額 1,840円  
資本組入額 920円  
払込金総額 552,000千円

(5) 【所有者別状況】

2019年10月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満株式の状況 (株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	-	6	23	22	13	1	1,160	1,225	-
所有株式数 (単元)	-	139	1,384	16,042	1,722	2	3,709	22,998	200
所有株式数の割合(%)	-	0.60	6.02	69.75	7.49	0.01	16.13	100	-

( 6 ) 【大株主の状況】

2019年10月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
英知興産株式会社	兵庫県西宮市大森町 1 - 21	1,580	68.69
MSIP CLIENT SECURITIES ( 常任代理人 モルガン・スタンレー MUFG証券株式会社 )	25 Cabot Square, Canary Wharf, London E14 4QA, U.K. ( 東京都千代田区大手町 1 - 9 - 7 大手町フィナンシャルシティ サウス タワー )	67	2.91
SMBC日興証券株式会社	東京都千代田区丸の内 3 - 3 - 1	61	2.66
NOMURA PB NOMINEES LIMITED OMNIBUS- MARGIN (CASHPB) ( 常任代理人 野村證券株式会社 )	1 ANGEL LANE, LONDON, EC4R 3AB, UNITED KINGDOM ( 東京都中央区日本橋 1 - 9 - 1 )	35	1.52
STATE STREET BANK AND TRUST COMPANY FOR STATE STREET BANK LUXEMBOURG SCA ON BEHALF OF ITS CLIENTS : CLIENT OMNI OM25 ( 常任代理人 香港上海銀行東京支店 )	P.O. BOX 351 BOSTON MASSACHUSETTS 02101 U.S.A. ( 東京都中央区日本橋 3 - 11 - 1 )	25	1.12
BNY GCM CLIENT ACCOUNT JPRD AC ISG (FE-AC) ( 常任代理人 株式会社三菱UFJ銀行 )	PETERBOROUGH COURT 133 FLEET STREET LONDON EC4A 2BB UNITED KINGDOM ( 東京都千代田区丸の内 2 - 7 - 1 )	25	1.11
志野 文哉	東京都中央区	24	1.04
和田山 朋弥	兵庫県西宮市	20	0.86
株式会社ライブスター証券	東京都千代田区丸の内 1 - 11 - 1	16	0.69
日本ビスカ株式会社	東京都新宿区新宿 6 - 24 - 20	13	0.56
計	-	1,867	81.21



(7)【議決権の状況】  
【発行済株式】

2019年10月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	-	-	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 2,299,800	22,998	権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式であります。単元株式数は100株であります。
単元未満株式	200	-	-
発行済株式総数	2,300,000	-	-
総株主の議決権	-	22,998	-

【自己株式等】

該当事項はありません。

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】該当事項はありません。

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2)【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

該当事項はありません。

(4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

該当事項はありません。

### 3【配当政策】

当社の配当政策は、株主の皆様に対する利益の還元を経営上の重要な施策の一つとして位置づけており、将来の事業展開と経営体質の強化のために必要な内部留保を確保しつつ、安定した配当を継続して実施していくことを基本方針としております。

当社の剰余金の配当は、年1回の期末配当を基本方針としておりますが、将来的な中間配当の実施に備え、会社法第454条第5項に規定する中間配当を行うことができる旨を定款で定めております。なお、これら剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会であります。

第34期の配当につきましては1株当たり50円の配当を実施しております。今後につきましても安定した配当を旨とし、内部留保の確保に留意してまいりたいと考えております。内部留保資金の用途につきましては、今後の事業展開への備えと設備投資等の資金として充当することとしております。

なお、第34期の剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額	1株当たり配当額
2020年1月29日 定時株主総会決議	115,000千円	50円

## 4【コーポレート・ガバナンスの状況等】

### (1)【コーポレート・ガバナンスの概要】

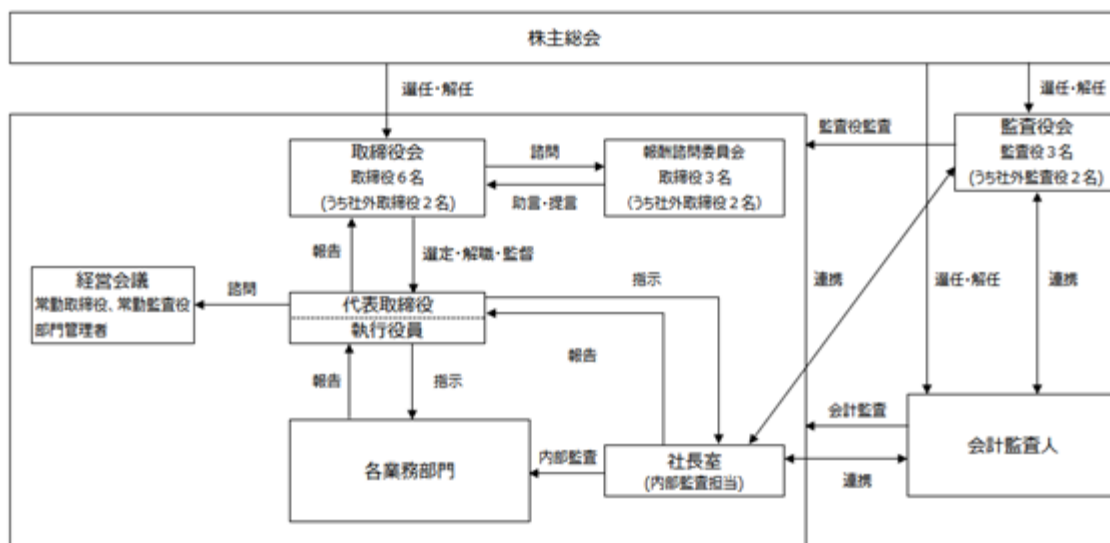
コーポレート・ガバナンスの取組みに関する基本的な考え方

当社は、経営環境の変化する中において、持続的な発展と成長、持続的な企業価値の最大化を目指し、顧客、投資家、社員、地域社会、及び、当社を取り巻くより広範囲な社会との相互信頼を構築し、維持していくという視点から、経営の健全性・効率性・透明性を確保すべく、最適なコーポレート・ガバナンスの整備構築を目指し、取締役会制度、監査役会制度を導入しております。

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

当社のコーポレート・ガバナンス体制の概要は次のとおりであります。

なお、2019年12月9日開催の臨時取締役会において、当社取締役の報酬等に関する手続きの公正性・透明性・客観性を強化し、コーポレート・ガバナンス体制のより一層の強化を図ることを目的として、取締役会の任意の諮問機関として報酬諮問委員会の設置を決議し、2020年1月29日に設置しております。



#### イ．取締役会

当社の取締役会は、提出日現在、取締役会長和田山英一、代表取締役社長和田山朋弥、取締役専務小林恒文、取締役経営管理本部長清水明、社外取締役西端雄二及び伊藤寛治の6名（うち社外取締役2名）で構成されております。代表取締役社長が議長を務め、毎月の定時取締役会のほか、必要に応じて臨時取締役会を開催しております。取締役会では、経営上の意思決定機関として、取締役会規程に基づき重要事項を決議し、取締役の業務執行状況を監督しております。また、社外取締役は、他社の代表取締役を務めた経験があり、経営者としての豊富な知識及び経験に基づき、社外の第三者の視点で取締役会への助言及び監督を行うことを期待して選任しております。事務局を経営管理部が担当し、会議の運営や議事録作成を行っております。

#### ロ．監査役会

当社は監査役会を設置しており、提出日現在、常勤監査役峯垣真介、非常勤の社外監査役野村祥子及び鳥山昌久の3名（うち社外監査役2名）で構成されております。監査役会は常勤監査役が議長を務め毎月1回開催され、監査に関する重要事項について情報交換、協議並びに決議を実施しております。また、緊急を要する事項があれば必要に応じて臨時監査役会を開催しております。常勤監査役は、取締役会のほか、経営会議等重要な会議に出席し、必要に応じ意見陳述を行うなど、常に取締役の業務執行を監視できる体制となっております。また、社外監査役は弁護士としての法的知見及び公認会計士としての財務・会計に関する専門的知見を有しており、専門的観点から取締役の業務執行を監視することを期待して選任しております。

監査役会には補助使用人はおりませんが、社長室（内部監査担当）と連携して監視活動を行っており、定期的に会計監査人を含めた三者によるミーティングを行うなど情報交換を密にし、監査機能の向上を図っております。

#### 八．報酬諮問委員会

報酬諮問委員会は社外取締役西端雄二及び伊藤寛治と取締役会長和田山英一の3名で構成されており、取締役会長が議長を務め、取締役会の諮問に基づき、次の各事項を審議し、取締役会に対し助言・提言を行うこととしております。

- a．取締役の個人別の報酬等の内容に係る決定に関する方針
- b．取締役の個人別の報酬等の内容
- c．前2号を決議するために必要な基本方針等の制定、変更、廃止
- d．その他、取締役の報酬等に関して取締役会が必要と認めた事項

委員の過半数を社外役員とすることで、当社取締役の報酬等に関する手続きの公正性・透明性・客観性を強化し、コーポレート・ガバナンス体制のより一層の強化を図ることを目的として設置しております。

#### 二．経営会議

経営会議は、代表取締役社長の諮問機関として、常勤取締役、常勤監査役及び代表取締役社長が指名する部門管理者で構成されております。経営会議は、原則として月1回開催し、経営上の重要事項及び月次予算の進捗状況の報告について審議を行い、意思決定の迅速化と業務執行の効率化を図っております。

#### ホ．執行役員制度

当社は、業務執行機能の強化を図るため、執行役員制度を導入しております。執行役員は、取締役会によって選任され、取締役会の決議によって定められた分担に従い、業務執行を行います。執行役員は4名で、任期は1年となっております。

#### ヘ．内部監査

当社は、内部管理体制の強化を図るため、代表取締役社長直轄の社長室（人員1名）を設置しており、法令の遵守状況及び業務活動の効率性等について、当社各部門に対し内部監査を実施し、業務改善に向け具体的に助言・改善勧告を行っております。

#### ト．企業統治の体制を採用する理由

上記のような企業統治体制を採用する理由は、迅速かつ適切な経営意思決定を可能とするため、及び取締役会において社外取締役及び社外監査役による専門的かつ客観的な意見を取り入れ、業務執行における監視機能を有効に機能させるためであります。

#### 企業統治に関するその他の事項

当社は、業務の適正性を確保するための体制として2016年8月29日の取締役会にて、「内部統制システムの基本方針」を定める決議を行っており（2018年7月改定）、現在その基本方針に基づき内部統制システムの運用を行っております。その概要は以下のとおりです。

#### イ．取締役、従業員の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

- a．取締役及び従業員がとるべき行動の規範を示した「年度経営計画書」を制定し、取締役及び従業員が法令・定款等を遵守することを徹底する。
- b．取締役会は、取締役及び従業員が法令・定款等を遵守する体制を整備・運用するため、社内諸規程を制定し、随時その有効性を検証する。
- c．取締役会は、「取締役会規程」に則り会社の業務執行を決定する。
- d．代表取締役社長は、取締役会から委任された会社の業務執行の決定を行うとともに、かかる決定、取締役会決議、取締役会規程に従い職務を執行する。
- e．取締役会が取締役の職務の執行を監督するため、取締役は会社の業務執行状況を取締役会に報告するとともに、他の取締役の職務執行を相互に監視・監督する。

#### ロ．取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

- a．取締役の職務の執行に係る情報については、法令及び「文書管理規程」に基づき、適切に作成、保存及び管理するとともに、取締役及び監査役は、これらの文書等を常時閲覧できるものとする。
- b．法令又は取引所適時開示規則に則り必要な情報開示を行う。

#### ハ．損失の危険の管理に関する規程その他の体制

- a．「リスク管理規程」を制定し、代表取締役社長の下、社長室が組織横断的リスク状況の監視並びに全社的な対応を行い、各部門所管業務に付随するリスク管理は各担当部署が行うこととする。
- b．各部門の責任者は、自部門が整備するリスクマネジメント体制の下、担当職務の業務内容を整理し、内在するリスクを把握、分析、評価した上で適切かつ迅速に対策を実施する。

- 二．取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
- a．取締役会規程、職務権限規程を定め、取締役の職務及び権限、責任の明確化を図る。
  - b．取締役会を毎月1回定期的に開催するほか、必要に応じて適宜臨時に開催する。
  - c．取締役会は、中期目標・経営目標・予算を策定し、代表取締役社長以下取締役はその達成に向けて職務を遂行し、取締役会がその実績管理を行う。
- ホ．監査役がその職務を補助すべき従業員を置くことを求めた場合における当該従業員に関する事項並びにその従業員の取締役からの独立性に関する事項
- a．監査役がその職務を補助すべき従業員を置くことを求めた場合、取締役会は監査役と協議の上、監査役を補助すべき従業員を指名することができる。
  - b．監査役が指定する補助すべき期間中は、指名された従業員への指揮権は監査役に委譲されたものとし、取締役の指揮命令は受けないものとする。
- ヘ．取締役及び従業員が監査役に報告するための体制その他の監査役への報告に関する体制
- a．当社の取締役は、監査役に重要な会議への出席の機会を提供する。
  - b．当社の取締役は、定期的に監査役に対して職務の執行状況を報告する。
  - c．当社の取締役及び従業員は、重要な法令や定款に違反する事実、重要な会計方針、会計基準及びその変更、会社に著しい損害を与える恐れのある事実を発見したときには、速やかに監査役に報告する。
  - d．当社の取締役は、上記b又はcの報告をしたことを理由として取締役又は従業員を不利に取り扱ってはならない。
  - e．監査役の職務の執行において生じる費用については、会社法第388条に基づくこととし、当社の取締役は、同条の請求に係る手続きを定める。
- ト．その他監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制
- a．代表取締役社長は監査役と定期的に会合を持ち、監査上の重要課題について情報・意見交換を行う。
  - b．社長室（内部監査担当）は会計監査人及び監査役と定期的に会合を持ち、情報・意見交換を行うとともに、監査役は、必要に応じて会計監査人及び社長室（内部監査担当）に報告を求める。
- チ．財務報告の信頼性を確保するための体制
- 財務報告の信頼性確保のため、社長室を内部統制の担当部門とし、代表取締役社長を委員長として、財務報告の適正性を確保するため、全社的な統制活動及び業務プロセスの統制活動を強化し、その運用体制を構築する。
- リ．反社会的勢力との取引排除に向けた基本的考え方
- a．当社は、2017年1月30日の取締役会にて決議された「反社会的勢力対応の基本方針」において反社会的勢力など一切関係をもたないことを定め、その遵守を取締役及び従業員の義務とする。
  - b．当社の取引先についても確認を行うなど、当社は、公共機関等との間で情報収集・交換ができる体制を構築し、反社会的勢力の排除に寄与することを基本方針とする。

#### リスク管理体制の整備の状況

当社は、社長室を主管部署としたリスク管理体制の整備を行っております。リスク管理規程を定め、リスクを把握し、リスクに対して適切な処置をとる管理体制の整備を行っております。

#### 取締役の定数

当社の取締役は10名以内とする旨を定款で定めております。

#### 取締役会で決議できる責任免除について

当社は、職務の遂行にあたり期待される役割を十分に発揮できるようにするため、会社法第426条第1項の規定により、任務を怠ったことによる取締役及び監査役（取締役及び監査役であった者を含む。）の損害賠償責任を、法令の限度において、取締役会の決議によって免除することができる旨定款に定めております。

#### 取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨、及び選任決議は累積投票によらない旨を定款で定めております。

#### 株主総会の特別決議要件

当社は、株主総会の円滑な運営を行うことを目的として、会社法第309条第2項に定める特別決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。

#### 自己株式の取得

当社は、自己株式の取得について、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって自己株式を取得することができる旨定款に定めております。これは、企業環境の変化に対応し、機動的な経営を遂行することを目的とするものです。

#### 責任限定契約の内容の概要

当社と社外取締役及び各監査役は、会社法第427条第1項の規定に基づき、同法第423条第1項に定める損害賠償責任について、責任限定契約を締結しております。当該契約に基づく賠償責任限度額は、会社法第425条第1項に規定する額としております。



( 2 ) 【役員の状況】

役員一覧

男性8名 女性1名 ( 役員のうち女性の比率11.1% )

役職名	氏 名	生年月日	略 歴	任期	所有株式数 ( 千株 )
取締役会長	和田山 英一	1950年 3月 4日	1975年 4月 日本オリベッティ(株) ( 現NTTデータジェ トロニクス(株) ) 入社 1978年 8月 富士ゼロックス(株) 入社 1985年10月 和田山コピーセンター(株) ( 現当社 ) 設 立 代表取締役社長 2016年10月 当社 代表取締役会長 2016年11月 (株)ニコール 代表取締役会長 2019年11月 当社取締役会長 ( 現任 )	( 注 ) 6	166 ( 注 ) 4
代表取締役社長	和田山 朋弥	1982年 7月26日	2005年 4月 兵庫三菱自動車販売(株) 入社 2008年 3月 当社 入社 2009年10月 当社 営業主任 2010年10月 当社 取締役 2011年11月 当社 取締役常務 2014年11月 当社 取締役専務 2016年10月 当社 代表取締役社長 ( 現任 ) 2016年11月 (株)ニコール 取締役	( 注 ) 6	503 ( 注 ) 4
取締役専務	小林 恒文	1958年11月 8日	1981年 4月 (株)広研 入社 1988年 9月 (株)光エージェンシー 入社 1998年11月 国際標識(株) ( 現(株)ケイエムアドシステ ム ) 入社 2000年 2月 当社 入社 当社 営業部長 2002年 2月 当社 取締役常務 2016年10月 当社 取締役専務 ( 現任 ) 2017年 3月 (株)ニコール 取締役 2017年 5月 (株)ニコール 取締役社長	( 注 ) 6	-
取締役 経営管理本部長	清水 明	1950年 6月24日	1975年 4月 京都セラミック(株) ( 現京セラ(株) ) 入社 2016年 8月 当社 取締役財務担当 2016年10月 当社 取締役経営管理本部長 ( 現任 )	( 注 ) 6	-
取締役	西端 雄二	1949年 9月24日	1973年 4月 (株)ノーリツ 入社 1997年 3月 (株)ノーリツ 取締役 2001年 9月 (株)ハーマンプロ ( 現(株)ハーマン ) 代表 取締役 2008年 9月 (株)ノーリツ 取締役常務執行役員 2009年 9月 (株)ノーリツ 代表取締役専務執行役員 2016年 8月 当社 監査役 2018年 1月 当社 社外取締役 ( 現任 )	( 注 ) 6	-
取締役	伊藤 寛治	1949年 8月12日	1974年 4月 飛鳥建設(株) 入社 2007年 6月 飛鳥建設(株) 取締役兼執行役員 経営管 理本部長 2011年 4月 飛鳥建設(株) 代表取締役兼上席執行役員 専務 経営管理本部長 2011年 5月 飛鳥建設(株) 代表取締役社長兼上席執行 役員社長 2017年 6月 飛鳥建設(株) 代表取締役会長 2019年 6月 飛鳥建設(株) 特別顧問 ( 現任 ) 2020年 1月 当社 社外取締役 ( 現任 )	( 注 ) 7	-

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
常勤監査役	峯垣 真介	1949年5月23日	1972年4月 ダイキン工業(株) 入社 1988年12月 日本アライアントコンピュータ(株) 入社 1990年12月 日本鋼管(株)(現JFEスチール(株)) 入社 1999年7月 (株)エクサに転籍 2016年8月 当社 監査役 2017年3月 当社 顧問 2018年1月 当社 監査役(現任)	(注)8	-
監査役	野村 祥子 (戸籍名: 鈴木 祥子)	1973年12月31日	2000年4月 弁護士登録 堂島法律事務所 入所(現任) 2010年4月 近畿大学法科大学院非常勤講師(現任) 2014年4月 大阪大学大学院高等司法研究科招へい教授(現任) 2015年6月 (株)島精機製作所社外監査役(現任) 2016年4月 同志社大学法科大学院非常勤講師(現任) 2018年1月 (株)神戸物産 社外取締役(現任) 当社 社外監査役(現任) 2019年6月 シノプフーズ(株) 社外監査役(現任)	(注)8	-
監査役	鳥山 昌久	1968年6月28日	1996年10月 中央監査法人 入所 2001年4月 公認会計士登録 2003年7月 (株)TFR総合研究所 入社 2008年7月 公認会計士鳥山事務所開設 所長(現任) 2008年8月 税理士登録 2008年8月 (株)野口精機 社外監査役 2015年6月 JTB印刷(株) 社外監査役(現任) 2018年1月 当社 社外監査役(現任) 2018年6月 (株)ブレイク・フィールド社 社外監査役(現任) 2019年4月 (株)アクティブアンドカンパニー 社外監査役(現任)	(注)8	-
計					669

- (注) 1. 取締役西端雄二、伊藤寛治の2名は、社外取締役であります。
2. 監査役野村祥子(戸籍名:鈴木祥子)、鳥山昌久の2名は、社外監査役であります。
3. 当社では、業務執行機能を強化し、機動的かつ効率的な経営を行うことを目的として、執行役員制度を導入しております。執行役員は4名で執行役員関東事業部責任者 長谷川浩司、執行役員新規開発統括責任者 中村祐輔、執行役員関西事業部責任者 宮本繁輝、執行役員ニコール制作部統括 浅沼幸一で構成されております。
4. 取締役会長和田山英一、代表取締役社長和田山朋弥の所有株式数は、英知興産株式会社が所有する株式数を含めた実質所有株式数を記載しております。
5. 代表取締役社長和田山朋弥は、取締役会長和田山英一の次女の配偶者であります。
6. 2019年1月25日開催の定時株主総会終結の時から、2020年10月期に係る定時株主総会の終結の時までであります。
7. 2020年1月29日開催の定時株主総会終結の時から、2020年10月期に係る定時株主総会の終結の時までであります。
8. 2019年1月25日開催の定時株主総会終結の時から、2022年10月期に係る定時株主総会の終結の時までであります。

## 社外役員の状況

当社の社外取締役は2名、社外監査役は2名であります。

社外取締役である西端雄二は、住宅機器メーカーの取締役としての豊富な知識と経験を有しており、同氏を社外取締役に選任することにより、経営の透明性の向上及び監督機能の強化につながるものと判断し、選任しております。

社外取締役である伊藤寛治は、建設会社の取締役としての豊富な知識と経験を有しており、同氏を社外取締役に選任することにより、経営の透明性の向上及び監督機能の強化につながるものと判断し、選任しております。

社外監査役である野村祥子（戸籍名：鈴木祥子）は、弁護士としての法律に関する専門知識を有していることから、同氏を社外監査役に選任することにより、客観的かつ中立の立場で当社を監査することができるかと判断し、選任しております。

社外監査役である鳥山昌久は、公認会計士としての企業会計に関する専門知識と監査及びコンサルティングの豊富な経験を有していることから、同氏を社外監査役に選任することにより、客観的かつ中立の立場で当社を監査することができるかと判断し、選任しております。

当社は、社外取締役又は社外監査役を選任するための独立性に関する基準又は方針として明確に定めたものではありませんが、その選任に際しては、経歴や当社との関係を踏まえて、十分な独立性が確保できることを前提に判断しております。

なお、社外取締役である西端雄二は当社新株予約権を900個（900株）保有しておりますが、それ以外に社外取締役及び社外監査役とは、人的関係、資本的関係及び取引関係その他利害関係を有しておりません。また、当該社外役員全員を金融商品取引所の定める独立役員として登録しております。

## 社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役は、毎月の定時取締役会及び臨時取締役会に出席し、取締役から業務執行の状況について、監査役から監査の進捗状況や内部統制の状況についてそれぞれ報告を受け、当社の状況や課題を把握するとともに、必要に応じて独立役員の立場からの意見を表明しております。また、社外監査役は取締役会及び監査役会に出席し、取締役から業務執行の状況について、常勤監査役から監査の進捗状況や内部統制の状況についてそれぞれ報告を受けるとともに、必要に応じて独立役員の立場からの意見を表明しております。

(3)【監査の状況】

監査役監査の状況

当社は、監査役会を設置しており、常勤監査役1名及び非常勤監査役2名(社外監査役)で構成されております。監査役会は毎月1回開催され、監査に関する重要事項について情報交換、協議並びに決議を実施しております。また、緊急を要する事項があれば必要に応じて臨時監査役会を開催しております。常勤監査役は、取締役会のほか、経営会議等重要な会議に出席し、必要に応じ意見陳述を行うなど、常に取締役の業務執行を監視できる体制となっております。

また、社長室(内部監査担当)及び監査法人と随時情報交換や意見交換を行うほか、定期的に三者によるミーティングを行うなど連携を密にし、監査機能の向上を図っております。

なお、社外監査役野村祥子は弁護士の資格を有し、企業法務に関する相当程度の知見を有しており、社外監査役鳥山昌久は公認会計士の資格を有し、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。

内部監査の状況

当社は、内部管理体制の強化を図るため、代表取締役社長直轄の社長室(人員1名)を設置しており、法令の遵守状況及び業務活動の効率性等について、当社各部門に対し内部監査を実施し、業務改善に向け具体的に助言・改善勧告を行っております。

内部監査担当は監査法人及び監査役と定期的に会合を持ち、情報・意見交換を行っております。

会計監査の状況

イ. 監査法人の名称

PwC京都監査法人

ロ. 業務を執行した公認会計士

指定社員 業務執行社員 若山 聡満

指定社員 業務執行社員 浦上 卓也

ハ. 監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士6名、会計士試験合格者2名、その他8名であります。

ニ. 監査法人の選定方針と理由

当社は、監査法人の選定に関しては、監査法人の概要、独立性、監査の品質管理体制、監査報酬の見積額等について書面又は面談を通じて説明を受け、監査実績を含め総合的に判断した結果、PwC京都監査法人を選定しております。

監査役会は、会計監査人の職務の執行に支障がある場合等、その必要があると判断した場合は、株主総会に提出する会計監査人の解任又は不再任に関する議案の内容を決定いたします。

監査役会は、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当すると認められる場合は、監査役全員の同意に基づき会計監査人を解任いたします。この場合、監査役会が選定した監査役は、解任後最初に招集される株主総会におきまして、会計監査人を解任した旨と解任の理由を報告いたします。

ホ. 監査役及び監査役会による監査法人の評価

当社の監査役及び監査役会は、監査法人に対して評価を行っております。この評価については、監査法人が独立の立場を保持し、かつ、適切な品質管理の水準に基づく監査を実施しているかを確認するとともに、監査法人からその職務の執行状況について報告を受け、必要に応じて説明を求めております。その結果、PwC京都監査法人の監査体制に問題はないと判断しております。

監査報酬の内容等

イ．監査公認会計士等に対する報酬の内容

区分	前連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬 (千円)	非監査業務に基づく報酬 (千円)
提出会社	10,000	-
連結子会社	-	-
計	10,000	-

当事業年度	
監査証明業務に基づく報酬 (千円)	非監査業務に基づく報酬 (千円)
12,000	1,000

当事業年度における非監査業務の内容は、公認会計士法第2条第1項の業務以外の業務であるコンフォートレター作成業務であります。

ロ．監査公認会計士等と同一のネットワークに属する組織に対する報酬（a.を除く）  
該当事項はありません。

ハ．その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容  
該当事項はありません。

ニ．監査報酬の決定方針

監査日数及び当社の規模・業務の特性等の要素を勘案して適切に決定しております。

ホ．監査役会が会計監査人の報酬に同意した理由

監査役会は、会計監査人の監査計画の内容、会計監査の職務遂行状況及び報酬見積りの算出根拠などが適切であるかどうかについて必要な検証を行ったうえで、会計監査人の報酬等の額について同意の判断をしております。

(4) 【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

当社は、役員の報酬等の額については株主総会で決議された報酬限度額や個々の職責と実績に基づき決定しております。

2016年8月29日開催の臨時株主総会において、取締役の報酬限度額は年額200,000千円以内（定款で定める取締役の員数は10名以内。本書提出日現在は6名）、監査役の報酬限度額は年額50,000千円以内（定款で定める監査役の員数は5名以内。本書提出日現在は3名）と決議いただいております。各取締役の固定報酬については取締役会において代表取締役社長和田山朋弥に一任する決議を行っており、各監査役の固定報酬については監査役の協議に一任しております。役員賞与につきましては、報酬限度額の範囲内で、業績や従業員賞与の支給状況等を総合的に勘案し、支給の有無及び支給額について取締役会で協議して決定しております。

なお、2019年12月9日開催の臨時取締役会において、当社取締役の報酬等に関する手続きの公正性・透明性・客観性を強化し、コーポレート・ガバナンス体制のより一層の強化を図ることを目的として、取締役会の任意の諮問機関として報酬諮問委員会の設置を決議し、2020年1月29日に設置しており、役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針について継続的な議論を行ってまいります。

また、役員退職慰労金については役員退職慰労金規程に基づき各役員の退任時に支給する予定であります。

役員報酬等

イ．役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額(千円)				対象となる 役員の員数 (人)
		固定報酬	賞与	業績連動報酬	退職慰労金	
取締役 (社外取締役を除く)	89,080	83,580	5,500	-	-	4
監査役 (社外監査役を除く)	4,680	4,380	300	-	-	1
社外役員	6,300	6,000	300	-	-	3

ロ．役員ごとの報酬等の総額等

報酬等の総額が1億円以上であるものが存在しないため、記載しておりません。

ハ．使用人兼務役員の使用人部分給与のうち重要なもの

該当事項はありません。

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、純投資目的である投資株式は保有しておらず、投資株式の区分の基準及び考え方は定めておりません。

保有目的が純投資以外の目的である投資株式

該当事項はありません。

保有目的が純投資目的である投資株式

該当事項はありません。

## 第5【経理の状況】

### 1．財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号)に基づいて作成しております。
- (2) 当社は、2018年1月11日開催の定時株主総会において、定款の一部変更を決議し、決算期を10月20日から10月31日に変更いたしました。  
したがって、前事業年度は、2017年10月21日から、2018年10月31日までの12ヶ月11日間となっております。

### 2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、事業年度(2018年11月1日から2019年10月31日まで)の財務諸表について、PwC京都監査法人により監査を受けております。

### 3．連結財務諸表について

当社は、連結子会社が存在しないため、連結財務諸表は作成しておりません。

### 4．財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、財務諸表の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適時適切に把握し、会計基準等の改正に的確に対応するために、財務・会計情報誌の購読及び各種セミナーに参加しております。

1【財務諸表等】  
(1)【財務諸表】  
【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2018年10月31日)	当事業年度 (2019年10月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	1,357,591	2,154,550
受取手形	95,789	59,312
電子記録債権	118,336	111,515
売掛金	479,787	514,071
仕掛品	57,896	5,631
原材料	10,735	8,216
貯蔵品	-	546
前払費用	15,921	20,937
その他	1,985	546
流動資産合計	2,138,042	2,875,329
固定資産		
有形固定資産		
建物	15,035	25,715
機械及び装置	409,047	428,708
車両運搬具	632	632
工具、器具及び備品	7,369	7,369
リース資産	80,178	76,342
その他	-	1,575
減価償却累計額	414,603	437,306
有形固定資産合計	97,659	103,037
無形固定資産		
ソフトウェア	2,882	4,532
のれん	39,164	34,251
顧客関連資産	26,281	20,990
無形固定資産合計	68,327	59,774
投資その他の資産		
出資金	60	60
敷金	68,802	66,977
長期前払費用	-	5,211
繰延税金資産	78,664	49,954
投資その他の資産合計	147,527	122,202
固定資産合計	313,514	285,015
資産合計	2,451,557	3,160,344



(単位：千円)

	前事業年度 (2018年10月31日)	当事業年度 (2019年10月31日)
<b>負債の部</b>		
流動負債		
買掛金	221,983	182,567
未払金	41,094	9,119
未払費用	10,152	41,432
未払法人税等	105,098	50,155
未払消費税等	34,650	118,776
預り金	15,571	15,554
賞与引当金	36,232	-
リース債務	22,386	11,746
流動負債合計	487,168	429,352
固定負債		
役員退職慰労引当金	116,108	121,060
資産除去債務	4,472	7,676
リース債務	18,367	13,692
固定負債合計	138,947	142,428
負債合計	626,115	571,781
純資産の部		
株主資本		
資本金	10,000	286,000
資本剰余金		
資本準備金	-	276,000
資本剰余金合計	-	276,000
利益剰余金		
利益準備金	2,500	2,500
その他利益剰余金		
別途積立金	840,000	840,000
繰越利益剰余金	972,941	1,184,062
利益剰余金合計	1,815,441	2,026,562
株主資本合計	1,825,441	2,588,562
純資産合計	1,825,441	2,588,562
負債純資産合計	2,451,557	3,160,344

## 【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2017年10月21日 至 2018年10月31日)	当事業年度 (自 2018年11月1日 至 2019年10月31日)
売上高	2,407,247	3,011,486
売上原価		
当期商品仕入高	3,076	710
当期製品製造原価	1,253,343	1,771,619
売上原価	1,256,420	1,772,330
売上総利益	1,150,827	1,239,156
販売費及び一般管理費		
役員報酬	81,660	100,060
給料及び手当	265,822	399,634
賞与引当金繰入額	17,029	-
役員退職慰労引当金繰入額	-	4,952
減価償却費	4,798	7,608
のれん償却額	1,364	4,912
顧客関連資産償却額	1,468	5,291
貸倒引当金繰入額	5,300	-
その他	230,743	290,049
販売費及び一般管理費合計	597,586	812,507
営業利益	553,240	426,649
営業外収益		
受取利息	0	0
受取家賃	105	-
経営指導料	810	-
物品受贈益	-	101
消費税等差額	-	514
雑収入	69	182
営業外収益合計	985	798
営業外費用		
支払利息	871	1,227
雑損失	-	1
営業外費用合計	871	1,229
経常利益	553,353	426,218
特別利益		
固定資産売却益	-	12,999
抱合せ株式消滅差益	139,418	-
特別利益合計	139,418	12,999
特別損失		
固定資産除却損	21,096	214
特別損失合計	1,096	14
税引前当期純利益	691,675	439,203
法人税、住民税及び事業税	162,516	99,372
法人税等調整額	14,403	28,710
法人税等合計	148,112	128,082
当期純利益	543,562	311,120

【製造原価明細書】

区分	注記 番号	前事業年度 (自 2017年10月21日 至 2018年10月31日)		当事業年度 (自 2018年11月1日 至 2019年10月31日)	
		金額(千円)	構成比 (%)	金額(千円)	構成比 (%)
材料費		530,878	40.7	629,340	36.6
労務費		439,287	33.7	619,090	36.0
経費		333,734	25.6	470,923	27.4
当期総製造費用		1,303,900	100.0	1,719,355	100.0
期首仕掛品たな卸高		3,585		57,896	
合併による仕掛品受入高		3,754		-	
合計		1,311,240		1,777,251	
期末仕掛品たな卸高		57,896		5,631	
当期製品製造原価		1,253,343		1,771,619	

(注) 経費の主な内訳は、次のとおりであります。

項目	前事業年度(千円) (自 2017年10月21日 至 2018年10月31日)	当事業年度(千円) (自 2018年11月1日 至 2019年10月31日)
賃借料	104,942	128,215
減価償却費	45,324	81,660
荷造運搬費	79,162	97,499
外注費	62,175	98,163

原価計算の方法

原価計算の方法は、個別原価計算によっております。

【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2017年10月21日 至 2018年10月31日）

（単位：千円）

	株主資本						純資産合計
	資本金	利益剰余金				株主資本合計	
		利益準備金	その他利益剰余金		利益剰余金合計		
			別途積立金	繰越利益剰余金			
当期首残高	10,000	2,500	840,000	489,378	1,331,878	1,341,878	1,341,878
当期変動額							
剰余金の配当				60,000	60,000	60,000	60,000
当期純利益				543,562	543,562	543,562	543,562
当期変動額合計	-	-	-	483,562	483,562	483,562	483,562
当期末残高	10,000	2,500	840,000	972,941	1,815,441	1,825,441	1,825,441

当事業年度（自 2018年11月1日 至 2019年10月31日）

（単位：千円）

	株主資本							純資産合計	
	資本金	資本剰余金		利益剰余金			株主資本合計		
		資本準備金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金				利益剰余金合計
					別途積立金	繰越利益剰余金			
当期首残高	10,000	-	-	2,500	840,000	972,941	1,815,441	1,825,441	1,825,441
当期変動額									
新株の発行	276,000	276,000	276,000					552,000	552,000
剰余金の配当						100,000	100,000	100,000	100,000
当期純利益						311,120	311,120	311,120	311,120
当期変動額合計	276,000	276,000	276,000	-	-	211,120	211,120	763,120	763,120
当期末残高	286,000	276,000	276,000	2,500	840,000	1,184,062	2,026,562	2,588,562	2,588,562

【キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

当事業年度  
(自 2018年11月1日  
至 2019年10月31日)

<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>	
税引前当期純利益	439,203
減価償却費	89,268
敷金償却費	1,829
のれん償却額	4,912
顧客関連資産償却額	5,291
賞与引当金の増減額(は減少)	36,232
役員退職慰労引当金の増減額(は減少)	4,952
受取利息及び受取配当金	0
支払利息	1,227
固定資産売却損益(は益)	12,999
固定資産除却損	14
売上債権の増減額(は増加)	9,013
たな卸資産の増減額(は増加)	54,236
仕入債務の増減額(は減少)	39,416
未払消費税等の増減額(は減少)	84,126
その他	8,242
小計	613,669
利息及び配当金の受取額	0
利息の支払額	1,227
法人税等の支払額	172,958
営業活動によるキャッシュ・フロー	439,483
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>	
有形固定資産の取得による支出	80,915
有形固定資産の売却による収入	13,000
無形固定資産の取得による支出	3,300
敷金の差入による支出	8,412
敷金の回収による収入	8,408
投資活動によるキャッシュ・フロー	71,218
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>	
株式の発行による収入	552,000
リース債務の返済による支出	23,305
配当金の支払額	100,000
財務活動によるキャッシュ・フロー	428,694
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	796,959
現金及び現金同等物の期首残高	1,357,591
現金及び現金同等物の期末残高	2,154,550

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. たな卸資産の評価基準及び評価方法

貸借対照表価格は収益性の低下に基づく簿価切り下げの方法によっております。

- (1) 仕掛品...個別法による原価法
- (2) 原材料・貯蔵品...最終仕入原価法による原価法

2. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産(リース資産を除く)

定率法を採用しております。

ただし、2016年4月1日以後に取得した建物附属設備については定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物	2～15年
機械及び装置	2～6年
車両運搬具	3年
工具、器具及び備品	4～5年

(2) 無形固定資産(リース資産を除く)

ソフトウェア

定額法

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づいて償却しております。

のれん

10年間で均等償却しております。

顧客関連資産

効果の及ぶ期間(7年)に基づく定額法によっております。

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引にかかるリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額をゼロとする定額法を採用しております。

3. 繰延資産の処理方法

株式交付費

支出時に全額費用として処理しております。

4. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

売上債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

なお、当事業年度においては、貸倒実績はなく、また貸倒懸念債権等もないため、貸倒引当金を計上しておりません。

(2) 賞与引当金

従業員の賞与金の支払に備えて、賞与支給見込額の当期負担額を計上しております。

なお、当事業年度においては、期末日までに賞与を支給済であるため、賞与引当金を計上しておりません。

(3) 役員退職慰労引当金

役員の退職慰労金の支出に備えて、役員退職慰労金規程に基づく期末要支給額を計上しております。

5. キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりスクシカ負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

6. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税抜方式によっております。

(未適用の会計基準等)

1. 収益認識に関する会計基準等

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会)

(1) 概要

国際会計基準審議会(IASB)及び米国財務会計基準審議会(FASB)は、共同して収益認識に関する包括的な会計基準の開発を行い、2014年5月に「顧客との契約から生じる収益」(IASBにおいてはIFRS第15号、FASBにおいてはTopic606)を公表しており、IFRS第15号は2018年1月1日以後開始する事業年度から、Topic606は2017年12月15日より後に開始する事業年度から適用される状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、収益認識に関する包括的な会計基準が開発され、適用指針と合わせて公表されたものです。

企業会計基準委員会の収益認識に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、IFRS第15号と整合性を図る便益の1つである財務諸表間の比較可能性の観点から、IFRS第15号の基本的な原則を取り入れることを出発点とし、会計基準を定めることとされ、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮すべき項目がある場合には、比較可能性を損なわせない範囲で代替的な取扱いを追加することとされております。

(2) 適用予定日

2022年10月期の期首から適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であり、あります。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)を当事業年度の期首から適用しており、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示しております。

この結果、前事業年度の貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」28,312千円は、「投資その他の資産」の「繰延税金資産」78,664千円に含めて表示しております。

(損益計算書関係)

1 固定資産売却益の内容は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年10月21日 至 2018年10月31日)	当事業年度 (自 2018年11月1日 至 2019年10月31日)
機械及び装置	- 千円	12,999千円

2 固定資産除却損の内容は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年10月21日 至 2018年10月31日)	当事業年度 (自 2018年11月1日 至 2019年10月31日)
機械及び装置	1,096千円	14千円

(株主資本等変動計算書関係)

前事業年度(自 2017年10月21日 至 2018年10月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当事業年度期首株式数(株)	当事業年度増加株式数(株)	当事業年度減少株式数(株)	当事業年度末株式数(株)
発行済株式				
普通株式(注)	200	1,999,800	-	2,000,000
合計	200	1,999,800	-	2,000,000

(注) 普通株式の数の増減は、株式分割による増加分であります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額(千円)	1株当たり配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年1月11日 定時株主総会	普通株式	60,000	300,000	2017年10月20日	2018年1月12日

(2) 基準日が当事業年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌事業年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額(千円)	配当の原資	1株当たり配当額(円)	基準日	効力発生日
2019年1月25日 定時株主総会	普通株式	100,000	利益剰余金	50	2018年10月31日	2019年1月28日

当事業年度(自 2018年11月1日 至 2019年10月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当事業年度期首株式数(株)	当事業年度増加株式数(株)	当事業年度減少株式数(株)	当事業年度末株式数(株)
発行済株式				
普通株式(注)	2,000,000	300,000	-	2,300,000
合計	2,000,000	300,000	-	2,300,000

(注) 普通株式の数の増減は、東京証券取引所マザーズ市場上場に伴う新株発行による増加であります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額(千円)	1株当たり配当額(円)	基準日	効力発生日
2019年1月25日 定時株主総会	普通株式	100,000	50	2018年10月31日	2019年1月28日

(2) 基準日が当事業年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌事業年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額(千円)	配当の原資	1株当たり配当額(円)	基準日	効力発生日
2020年1月29日 定時株主総会	普通株式	115,000	利益剰余金	50	2019年10月31日	2020年1月30日



(キャッシュ・フロー計算書関係)

前事業年度は連結財務諸表を作成していましたが、当事業年度は個別財務諸表を作成しております。したがって、前事業年度については記載しておりません。

現金及び現金同等物の期末残高と貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	当事業年度 (自 2018年11月1日 至 2019年10月31日)
現金及び預金勘定	2,154,550千円
預入期間が3か月を超える定期預金	-
現金及び現金同等物	2,154,550

(リース取引関係)

前事業年度は連結財務諸表を作成していましたが、当事業年度は個別財務諸表を作成しております。したがって、前事業年度については記載しておりません。

1. ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

(1) リース資産の内容

有形固定資産

主として、インクジェットプリンター、加工機であります。

(2) リース資産の減価償却の方法

重要な会計方針「2. 固定資産の減価償却の方法(3) リース資産」に記載のとおりであります。

2. オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：千円)

	当事業年度 (2019年10月31日)
1年内	4,845
1年超	6,131
合計	10,977

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社は、経営活動に必要な資金の調達を自己資金にて賅っております。余裕資金につきましては安全性の高い短期的な現金及び預金で運用し、投機的な取引は行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形、電子記録債権及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。敷金は建物賃貸借契約等に係るものであり、差入先の信用リスクに晒されております。営業債務である買掛金は、1年以内の支払期日であります。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

当社は、債権管理に関する社内規程に従い、営業債権について経営管理部が主要な取引先の状況を定期的にモニタリングし、取引相手ごとに期日及び残高を管理するとともに、財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。また、敷金について、差入先の信用状況を定期的に把握することでリスクの軽減を図っております。営業債務である買掛金について、経営管理部が適時に資金繰り計画を作成更新することにより、流動性リスクを管理しております。

2. 金融商品の時価等に関する事項

貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含めておりません。(注)2.を参照)

前事業年度(2018年10月31日)

	貸借対照表計上額 (千円)	時価(千円)	差額(千円)
(1) 現金及び預金	1,357,591	1,357,591	-
(2) 受取手形	95,789	95,789	-
(3) 電子記録債権	118,336	118,336	-
(4) 売掛金	479,787	479,787	-
資産計	2,051,504	2,051,504	-
(1) 買掛金	221,983	221,983	-
(2) 未払金	41,094	41,094	-
(3) 未払法人税等	105,098	105,098	-
(4) 未払消費税等	34,650	34,650	-
(5) リース債務	40,754	40,754	-
負債計	443,580	443,580	-

当事業年度（2019年10月31日）

	貸借対照表計上額 (千円)	時価(千円)	差額(千円)
(1) 現金及び預金	2,154,550	2,154,550	-
(2) 受取手形	59,312	59,312	-
(3) 電子記録債権	111,515	111,515	-
(4) 売掛金	514,071	514,071	-
資産計	2,839,450	2,839,450	-
(1) 買掛金	182,567	182,567	-
(2) 未払金	9,119	9,119	-
(3) 未払法人税等	50,155	50,155	-
(4) 未払消費税等	118,776	118,776	-
(5) リース債務	25,438	25,438	-
負債計	386,057	386,057	-

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法に関する事項

資産

(1) 現金及び預金、(2) 受取手形、(3) 電子記録債権、(4) 売掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

負債

(1) 買掛金、(2) 未払金、(3) 未払法人税等、(4) 未払消費税等

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(5) リース債務

リース債務の時価については、元利金の合計額を同様の新規リース取引を行った場合に想定される利率により割引計算を行った結果、時価は帳簿価額とほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。なお、リース債務は流動負債及び固定負債の合計額であります。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の貸借対照表計上額

(単位：千円)

区分	前事業年度 (2018年10月31日)	当事業年度 (2019年10月31日)
敷金	68,802	66,977

敷金は、市場価格がなく、かつ、実質的な預託期間を算定することは困難であることから、合理的なキャッシュ・フローを見積もることが極めて困難と認められるため、上表には含めておりません。

3. 金銭債権の決算日後の償還予定額  
前事業年度(2018年10月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	1,357,591	-	-	-
受取手形	95,789	-	-	-
電子記録債権	118,336	-	-	-
売掛金	479,787	-	-	-
合 計	2,051,504	-	-	-

当事業年度(2019年10月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	2,154,550	-	-	-
受取手形	59,312	-	-	-
電子記録債権	111,515	-	-	-
売掛金	514,071	-	-	-
合 計	2,839,450	-	-	-

4. リース債務の決算日後の返済予定額  
前事業年度(2018年10月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
リース債務	22,386	9,558	6,551	2,257	-	-
合 計	22,386	9,558	6,551	2,257	-	-

当事業年度(2019年10月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
リース債務	11,746	8,851	4,349	490	-	-
合 計	11,746	8,851	4,349	490	-	-

(ストック・オプション等関係)

前事業年度は連結財務諸表を作成していましたが、当事業年度は個別財務諸表を作成しております。したがって、前事業年度については記載していません。

当事業年度(自 2018年11月1日 至 2019年10月31日)

1. スtock・オプションに係る費用計上額及び科目名

当社はストック・オプション付与日時点において未公開企業であり、ストック・オプション等の単位当たりの本源的価値は0円であるため、費用計上はしていません。

2. スtock・オプションの内容、規模及びその変動状況

(1) スtock・オプションの内容

	第1回新株予約権
付与対象者の区分及び人数	当社取締役 3名 当社従業員 90名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)	普通株式 70,000株
付与日	2018年10月20日
権利確定条件	「第4 提出会社の状況 1. 株式等の状況 (2) 新株予約権等の状況」に記載しております。
対象勤務期間	対象期間の定めはありません。
権利行使期間	自2021年10月21日 至2028年9月20日

(注) 株式数に換算して記載しております。なお、2018年4月20日付株式分割(普通株式1株につき10,000株の割合)による分割後の株式数に換算して記載しております。

(2) スtock・オプションの規模及びその変動状況

当事業年度(2019年10月期)において存在したストック・オプションを対象とし、ストック・オプションの数については、株式数に換算して記載しております。

ストック・オプションの数

	第1回新株予約権
権利確定前 (株)	
前事業年度末	70,000
付与	-
失効	200
権利確定	-
未確定残	69,800
権利確定後 (株)	
前事業年度末	-
権利確定	-
権利行使	-
失効	-
未行使残	-

(注) 2018年4月20日付株式分割(普通株式1株につき10,000株の割合)による分割後の株式数に換算して記載しております。

単価情報

		第1回新株予約権
権利行使価格	(円)	1,080
行使時平均株価	(円)	-
付与日における公正な評価単価	(円)	-

(注) 2018年4月20日付株式分割(普通株式1株につき10,000株の割合)による分割後の価格に換算して記載しております。

3. ストック・オプションの公正な評価単価の見積方法

ストック・オプション付与日時点において、当社は未公開企業であるため、ストック・オプションの公正な評価単価の見積方法を単位当たりの本源的価値の見積りによっております。また、単位当たりの本源的価値の見積方法は、ディスカウント・キャッシュ・フロー法等を用いております。なお、算定の結果、株式の評価額が新株予約権の行使時の払込価額以下のため、単位当たりの本源的価値はゼロとなり、ストック・オプションの公正な評価単価もゼロと算定しております。

4. ストック・オプションの権利確定数の見積方法

基本的には、将来の失効数の合理的な見積りは困難であるため、実績の失効数のみ反映させる方法を採用しております。

5. ストック・オプションの単位当たりの本源的価値により算定を行う場合の当事業年度末における本源的価値の合計額及び当事業年度において権利行使されたストック・オプションの権利行使日における本源的価値の合計額

(1) 当事業年度末における本源的価値の合計額	67,636千円
(2) 当事業年度において権利行使されたストック・オプションの 権利行使日における本源的価値の合計額	- 千円

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2018年10月31日)	当事業年度 (2019年10月31日)
繰延税金資産		
未払事業税	11,208千円	5,704千円
未払事業所税	1,054	1,044
賞与引当金	12,536	-
役員退職慰労引当金	40,173	37,044
資産除去債務	4,823	5,476
資産調整勘定	14,627	8,501
その他	4,175	1,367
繰延税金資産合計	88,599	59,138
繰延税金負債		
顧客関連資産	9,093	6,423
その他	841	2,761
繰延税金負債合計	9,935	9,184
繰延税金資産の純額	78,664	49,954

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2018年10月31日)	当事業年度 (2019年10月31日)
法定実効税率	34.8%	法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。
(調整)		
住民税均等割	0.1	
税額控除	3.3	
軽減税率適用による影響	0.2	
抱合せ株式消滅差益	7.0	
のれん償却額	0.1	
その他	3.0	
税効果会計適用後の法人税等の負担率	21.4	

(資産除去債務関係)

1. 資産除去債務のうち貸借対照表に計上しているもの

(1) 当該資産除去債務の概要

ニコール事業部の不動産賃借契約に伴う原状回復義務等であります。

(2) 当該資産除去債務の金額の算定方法

使用見込期間を取得から15年と見積り、割引率は0.858%を使用して資産除去債務の金額を計算しております。

(3) 当該資産除去債務の総額の増減

	前事業年度 (自 2017年10月21日 至 2018年10月31日)	当事業年度 (自 2018年11月1日 至 2019年10月31日)
期首残高	- 千円	4,472千円
有形固定資産の取得に伴う増加額	-	3,155
合併による受入額	4,461	-
時の経過による調整額	10	49
期末残高	4,472	7,676

2. 資産除去債務のうち貸借対照表に計上していないもの

当社は、大阪本店・東京本社の不動産賃貸借契約に基づく退去時における原状回復義務を資産除去債務として認識しておりますが、当該債務の総額に重要性が乏しいため、記載を省略しております。

なお、当事業年度末における資産除去債務は、負債計上に代えて、不動産賃貸借契約に関連する敷金の回収が最終的に見込めないと認められる金額を合理的に見積り、当事業年度の負担に属する金額を費用に計上する方法によっております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

当社は、インクジェット出力事業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【関連情報】

前事業年度は連結財務諸表を作成していましたが、当事業年度は個別財務諸表を作成しております。したがって、前事業年度については記載しておりません。

当事業年度(自 2018年11月1日 至 2019年10月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

インクジェット出力事業の外部顧客への売上高が損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位:千円)

顧客の氏名又は名称	売上高	関連するセグメント名
フリーユ-株	333,158	インクジェット出力事業

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前事業年度は連結財務諸表を作成していましたが、当事業年度は個別財務諸表を作成しております。したがって、前事業年度については記載しておりません。

当事業年度(自 2018年11月1日 至 2019年10月31日)

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前事業年度は連結財務諸表を作成していましたが、当事業年度は個別財務諸表を作成しております。したがって、前事業年度については記載しておりません。

当事業年度(自 2018年11月1日 至 2019年10月31日)

当社は、インクジェット出力事業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前事業年度は連結財務諸表を作成していましたが、当事業年度は個別財務諸表を作成しております。したがって、前事業年度については記載しておりません。

当事業年度(自 2018年11月1日 至 2019年10月31日)

該当事項はありません。



【関連当事者情報】

1 関連当事者との取引

前事業年度は連結財務諸表を作成していましたが、当事業年度は個別財務諸表を作成しております。したがって、前事業年度については記載しておりません。

当事業年度（自 2018年11月1日 至 2019年10月31日）

該当事項はありません。

2 親会社又は重要な関連会社に関する注記

(1) 親会社情報

英知興産株式会社（非上場）

(2) 重要な関連会社の要約財務情報

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前事業年度 (自 2017年10月21日 至 2018年10月31日)	当事業年度 (自 2018年11月1日 至 2019年10月31日)
1株当たり純資産額	912円72銭	1,125円46銭
1株当たり当期純利益	271円78銭	149円36銭
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	- 円	146円98銭

(注) 1. 当社は、2018年4月20日付で普通株式1株につき10,000株の割合で株式分割を行っております。前事業年度の期首に当該株式分割が行われたと仮定して1株当たり当期純利益を算定しております。

2. 前事業年度の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式は存在するものの、当社株式は非上場であったため、期中平均株価が把握できませんので記載しておりません。

3. 当事業年度の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、当社は2019年7月24日に東京証券取引所マザーズ市場に上場したため、新規上場日から当事業年度末日までの平均株価を期中平均株価とみなして算定しております。

4. 1株当たり当期純利益及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定上の基礎は以下のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年10月21日 至 2018年10月31日)	当事業年度 (自 2018年11月1日 至 2019年10月31日)
1株当たり当期純利益		
当期純利益(千円)	543,562	311,120
普通株主に帰属しない金額(千円)	-	-
普通株式に係る当期純利益(千円)	543,562	311,120
普通株式の期中平均株式数(株)	2,000,000	2,083,014
潜在株式調整後1株当たり当期純利益		
当期純利益調整額(千円)	-	-
普通株式増加数(株)	-	33,785
(うち新株予約権(株))	(-)	(33,785)
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定に含めなかった潜在株式の概要	新株予約権1種類 (新株予約権の数70,000個)	-

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (千円)	当期末残高 (千円)	当期末減価 償却累計額 又は償却累 計額 (千円)	当期償却額 (千円)	差引当期末 残高 (千円)
有形固定資産							
建物	15,035	10,680	-	25,715	7,657	2,847	18,058
機械及び装置	409,047	72,716	53,055	428,708	368,930	61,281	59,777
車両運搬具	632	-	-	632	632	76	0
工具、器具及び備品	7,369	-	-	7,369	6,274	841	1,095
リース資産	80,178	7,989	11,825	76,342	53,286	21,996	23,056
その他	-	1,575	-	1,575	525	525	1,050
有形固定資産計	512,263	92,962	64,881	540,344	437,306	87,569	103,037
無形固定資産							
ソフトウェア	6,711	3,300	-	10,011	5,479	1,649	4,532
のれん	49,125	-	-	49,125	14,874	4,912	34,251
顧客関連資産	37,000	-	-	37,000	16,009	5,291	20,990
無形固定資産計	92,837	3,300	-	96,137	36,363	11,853	59,774
長期前払費用	-	8,002	2,630	5,371	160	160	5,211

(注) 1. 当期増加額のうち主なものは次のとおりであります。

機械及び装置の増加

インクジェットプリンター購入 70,606千円

2. 当期減少額のうち主なものは次のとおりであります。

機械及び装置の減少

インクジェットプリンター売却 47,500千円

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
1年以内に返済予定のリース債務	22,386	11,746	3.3	-
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	18,367	13,692	3.0	2020年11月～ 2023年1月
合計	40,754	25,438	-	-

(注) 1. 平均利率については、借入金等の期末残高に対する加重平均利率を記載しております。

2. リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)の貸借対照表日後5年間の返済予定額は以下のとおりであります。

	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
リース債務	8,851	4,349	490	-

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (目的使用) (千円)	当期減少額 (その他) (千円)	当期末残高 (千円)
賞与引当金	36,232	-	36,232	-	-
役員退職慰労引当金	116,108	4,952	-	-	121,060

【資産除去債務明細表】

明細表に記載すべき事項が財務諸表等規則第8条の28に規定する注記事項として記載されているため、記載を省略しております。

(2)【主な資産及び負債の内容】

資産の部

イ．現金及び預金

区分	金額(千円)
銀行預金	
当座預金	1,552,000
普通預金	602,550
合計	2,154,550

ロ．受取手形

相手先別内訳

相手先	金額(千円)
(株)クレスト	42,450
デコラティブシステム(株)	6,828
レプラスデザイン(株)	2,617
大洋工芸(株)	1,710
岩倉印刷紙業(株)	1,501
その他	4,205
合計	59,312

期日別内訳

期日別	金額(千円)
2019年11月	8,958
12月	14,679
2020年1月	22,825
2月	12,848
合計	59,312

八．売掛金  
相手先別内訳

相手先	金額(千円)
フリー(株)	82,338
(株)ベストプロジェクト	39,299
(株)クレスト	26,461
(株)サンゲツ	12,593
(株)イデイ	9,919
その他	343,460
合計	514,071

売掛金の発生及び回収並びに滞留状況

当期首残高 (千円)	当期発生高 (千円)	当期回収高 (千円)	当期末残高 (千円)	回収率(%)	滞留期間(日)
(A)	(B)	(C)	(D)	$\frac{(C)}{(A)+(B)} \times 100$	$\frac{(A)+(D)}{2} - \frac{(B)}{365}$
479,787	3,269,923	3,235,639	514,071	86.29	55

(注) 当期発生高には消費税等を含んでおります。

二．電子記録債権  
相手先別内訳

相手先	金額(千円)
フリー(株)	64,739
(株)ファースト	18,468
凸版印刷(株)	14,099
東洋紙業(株)	12,256
アスノック(株)	1,951
合計	111,515

期日別内訳

期日別	金額(千円)
2019年11月	8,471
12月	52,487
2020年1月	32,684
2月	13,427
3月	4,443
合計	111,515

ホ．仕掛品

品目	金額(千円)
制作工程仕掛品	5,631
合計	5,631

ヘ．原材料

品目	金額(千円)
制作用材料用紙等	8,216
合計	8,216

ト．貯蔵品

品目	金額(千円)
機械部品等	546
合計	546

負債の部

イ．買掛金

相手先	金額(千円)
アイケーシー(株)	28,327
ジェットグラフ(株)	21,579
(株)シージェーピーグラフィックス	14,850
(株)フジテックス	8,670
(株)ニップコーポレーション	6,947
その他	102,191
合計	182,567

(3)【その他】

当事業年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当事業年度
売上高 (千円)	761,840	1,505,647	2,193,086	3,011,486
税引前四半期(当期)純利益 (千円)	146,676	269,843	329,767	439,203
四半期(当期)純利益 (千円)	96,219	177,287	230,177	311,120
1株当たり四半期(当期)純利益(円)	48.10	88.64	114.52	149.36

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益 (円)	48.10	40.53	26.06	35.19

(注) 当社は、2019年7月24日付で東京証券取引所マザーズ市場に上場いたしましたので、第1四半期及び第2四半期の四半期報告書は提出していませんが、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、第2四半期会計期間及び第2四半期累計期間の四半期財務諸表について、PwC京都監査法人により四半期レビューを受けております。

## 第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	毎年11月1日から翌年10月31日まで
定時株主総会	毎事業年度終了後3ヶ月以内
基準日	毎年10月31日
剰余金の配当の基準日	毎年4月30日、毎年10月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り 取扱場所 株主名簿管理人 取次所 買取手数料	大阪市中央区伏見町三丁目6番3号 三菱UFJ信託銀行株式会社 大阪証券代行部 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 - 株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	電子公告とする。 ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合の公告方法は、日本経済新聞に掲載する方法とする。 公告掲載URL <a href="https://www.bandp.co.jp/">https://www.bandp.co.jp/</a>
株主に対する特典	該当事項はありません。

(注) 当社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない旨、定款に定めております。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
- (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利



## 第7【提出会社の参考情報】

### 1【提出会社の親会社等の情報】

当社の金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等は、英知興産株式会社であります。

### 2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券届出書(有償一般募集増資及び売出し)及びその添付書類

2019年6月19日近畿財務局長に提出。

(2) 有価証券届出書の訂正届出書

2019年7月4日及び2019年7月12日近畿財務局長に提出。

2019年6月19日提出の有価証券届出書に係る訂正届出書であります。

(3) 四半期報告書及び確認書

(第34期第3四半期)(自 2019年5月1日 至 2019年7月31日)2019年9月10日近畿財務局長に提出。

(4) 臨時報告書

2019年10月18日近畿財務局長に提出。

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号(代表取締役の異動)に基づく臨時報告書であります。

2020年1月30日近畿財務局長に提出。

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(株主総会における議決権行使の結果)に基づく臨時報告書であります。

## 第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

## 独立監査人の監査報告書

2020年1月30日

株式会社ピーアンドピー  
取締役会 御中

P w C 京都監査法人

指定社員 公認会計士 若山 聡満 印  
業務執行社員

指定社員 公認会計士 浦上 卓也 印  
業務執行社員

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社ピーアンドピーの2018年11月1日から2019年10月31日までの第34期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、キャッシュ・フロー計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

### 財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

### 監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社ピーアンドピーの2019年10月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する事業年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

- (注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
2. X B R L データは監査の対象には含まれていません。